

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2013

5

ISSN 1340-8917



特集 ■ 蔵を生かしたまちづくり

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／あらゆる世代が明るく笑顔で暮らせる「生き活き岡山」の実現に向けて 伊原木隆太(岡山県知事)

特集

蔵を生かしたまちづくり

- 4 基調論文 蔵の魅力を活かした観光まちづくりを 丁野 朗 (公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所長)
- 8 岩手県奥州市 蔵の街、音・水・緑の街づくり 亀井祐一
- 10 福島県喜多方市 観光振興に向けて「蔵」を活用 遠藤 実
- 12 埼玉県深谷市 酒蔵を改装した「街の映画館」 竹石研二
- 14 千葉県神崎町 酒蔵を中心に「発酵の里」づくり 石橋正彦
- 16 富山県富山市 廻船問屋の町屋と土蔵を生かし町並み再生 榎田隆一郎
- 18 長野県須坂市 蔵の街並みを大学のキャンパスに 滝沢健一
- 20 愛知県岡崎市 ドラマのロケを契機に味噌蔵周辺を整備 廣山嘉也
- 22 兵庫県姫路市 広域連携で酒蔵めぐりツアーを推進 姫路市市長公室 企画政策推進室
- 24 鳥取県倉吉市 白壁土蔵の街、賑わい復活をめざして 田村幹夫
- 26 広島県東広島市 酒都・西条の酒蔵通りを観光資源に 来得康德
- 28 愛媛県宇和島市 酒蔵をコミュニティー再生の拠点に活用 森田浩二
- 30 佐賀県鹿島市 酒蔵ツーリズム®で街を活性化 山口 洋
- 32 副基調論文 蔵によるまちづくり 佐藤 翼 (株式会社 日本政策投資銀行地域企画部)

レギュラーレポート

- 36 スポーツ拠点づくり推進事業 静岡県袋井市
エアロビックで市民の健康づくり 戸塚隆雄
- 38 地域トピックス 東京都荒川区
住民の幸福実感向上を目標に 森田修康
- 39 「地域おこし協力隊」の活動事例(9) 長野県小谷村
合コン開催、若者の起業を支援 北村和則
- 40 移住・交流推進支援事業 広島県大崎上島町
移住促進に向けコーディネーターを養成 長谷川尚道
- 42 地域づくり団体探訪 福井県あわら市
あわら湯けむり創生塾
観光客と市民でにぎわう温泉街を目指して

- 44 書籍紹介
首長の思い
- 45 「笑顔に出会うまち・朝霞」を目指して 富岡勝則 (朝霞市長)
- 48 センター通信

グラビア

- 2 蔵を生かしたまちづくり
- 46 都道府県漫遊 【宮崎県】
- 47 手前みそですが… 【長野県上田市】



南部町で開催された「地歌舞伎の祭典」

また、市町村主催事業として、79に及び芸術文化イベントから、地域の伝統行事や自然を生かした特色あるイベントまでが、県下27の全市町村を舞台に繰り広げられている。

会期は11月10日まで。詳しくは公式ウェブサイトへ(「やまなし国文祭」で検索)。

問い合わせ…0555-1223-11846

【表紙写真】第28回国民文化祭・やまなし2013オープニングイベント(県芸術文化団体による総合舞台の様子)

(写真提供…第28回国民文化祭山梨県実行委員会)

富士の国やまなし国文祭(冬のステージオープニングイベント)

表紙

あらゆる世代が明るく笑顔で暮らせる 「生き活き岡山」の実現に向けて

岡山県知事 ● 伊原本隆太



岡山県知事の伊原本隆太です。

我がふるさと岡山は、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれている上、陸海空の交通インフラや、水島コンビナートをはじめとする産業集積、全国的にも高水準の医療体制、高品質の農林水産物など、力強い経済活動と豊かで快適な生活の基盤が整っている地域です。

私は、この郷土岡山県のために是非ともお役に立ちたい、岡山を元気にしたいとの強い思いを胸に、昨年11月、知事に就任いたしました。

私の挑戦は大きく2つ、教育の再生と産業の活性化にあります。これらはいずれも、本県の限らない発展の礎となるものです。既存の枠組みに決してとらわれることなく、あらゆる手段にチャレンジし、成功事例を生み出していきたくと考えております。

まず、教育の再生です。本県の教育を取り巻く環境は深刻な状況にあり、暴力行為などの問題行動や不登校、子どもたちの学力の面で、客観的なデータとして問題点が示されています。問題行動等に対しては、新たな問題行動等を生まない未然防止のアプローチを強化し、非行防止教室を開くなど、生徒の心に響くリアリティーあふれる教育を推進していきます。また、学習時間の確保に焦点を当てた取組を進め、これまでの県内一律の施策から、明確な課題意識を持って意欲的に学力向上に取り組む市町村を集中的に支援し、成功事例を積み重ねることで、市町村や地域の方々と一緒になって、本県の未来を生きる子どもたちの学力の向上を図っていきます。

次に、産業の活性化です。県内企業の技術力や競争力を大きく伸ばし、岡山の強み、魅力の発信や、規制緩和によるビジネス環境の整備などを通じて、今後の成長を担う優良企業を積極的に誘致するなどにより、「売れる」モノづくりや「選ばれる」地域づくりに全力で取り組んでいきます。

雇用が創出され、安心して働くことのできる地域では、生活の安定や将来への安心が生まれ、そこには、新たな需要や消費が呼び起こされ、経済活動が活発化していくことにもつながっていきます。

私は、岡山を、新たなビジネスの起業や新技術の開発など、イノベーションが湧き起こる躍動感あふれる地域にしたいと思っています。

また、県民が笑顔で未来に向かってチャレンジするためには、大切な命や財産が守られ、生活に不便がなく、毎日健康に過ごせる環境が整っていなければなりません。そのことが確かに実感できるよう、防災・減災対策や犯罪の抑止と検挙を徹底するための取組、新たな地域交通手段の検討、健康寿命の延伸などで様々な手だてを着実に進めていきます。

知事に就任するまで、14年間、私は民間企業の経営者として会社の舵取りを行ってきました。行政にあっても、企業における「顧客重視」、「コスト意識」、「スピード感」の3つを取り入れることで、県民ニーズをつぶさに汲み取り、最少のコストでタイムリーな政策を実現することができると考えています。

今、私は、自らが率いている県庁組織に予算主義から決算主義へとこれまでの考え方を変えていくこと、カイゼン文化を浸透させることなど、県庁文化の改革に取り組んでいます。県民の期待に応えられる組織づくりを進め、県民に目に見える形で成果を出していかなければなりません。

愛する郷土岡山県を、元気に学んで遊ぶ子ども、失敗を恐れず挑戦する若者、安心して子どもを育む家族、そして健やかに暮らすお年寄りで満たしていきたい、私は、このような思いを持って、「生き活き岡山」の実現に向けて邁進していきます。

蔵を生かしたまちづくり



国の登録有形文化財にも指定されている若喜レンガ蔵
● 福島県喜多方市 (p10-11)



黒壁ガラス館と歩行者専用道路の蔵町モール。ガラス製品やオルゴールを販売する黒壁ガラス館は街のシンボルとなっている
● 岩手県奥州市 (p8-9)



酒蔵まつりで試飲する来場者。今年のまつりには1日で4万5000人が訪れた
● 千葉県神崎町 (p14-15)



酒蔵を改修した映画館「深谷シネマ」。コミュニティ再生の核になっている
● 埼玉県深谷市 (p12-13)



学生による建物（蔵）調査の様子。大学の授業の一環として取り入れられている
● 長野県須坂市 (p18-19)



土蔵の再生。泥団子を塗り、土壁を造る作業を進める様子
● 富山県富山市 (p16-17)



第1回酒蔵めぐりツアーの出発式。播磨地域の酒蔵を
回るこのバスツアーはリピーターも現れるなど好評だ

● 兵庫県姫路市 (p22-23)



歴史的景観が美しい八帖地区の「八丁蔵通り」の
様子

● 愛知県岡崎市 (p20-21)



酒蔵が集積する東広島市の西条地区。蔵元の赤煉瓦
の煙突も見える

● 広島県東広島市 (p26-27)



赤瓦に覆われた白壁土蔵群。江戸時代から続く倉
吉の景観

● 鳥取県倉吉市 (p24-25)



昨年3月の酒蔵ツーリズムの様子。酒蔵通りは観光客
であふれるほどだった

● 佐賀県鹿島市 (p30-31)



酒蔵でカフェ。酒蔵が地域コミュニティー再生の
拠点になっている

● 愛媛県宇和島市 (p28-29)

蔵の魅力を活かした観光まちづくりを

―「まちづかい」の思想に学ぶ―



公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所長
多摩大学大学院客員教授
法政大学キャリアデザイン学部講師

● 丁野 朗

東日本大震災から見えた歴史遺産の価値

平時には何も感じない当たりまえの景観や建物。その建物たちは、古さゆえに都市再開発のなかで次々と破却されつつある。東日本大震災は、こうしたさまざまな歴史的建造物、さらには祭りや伝統工芸などの多くを流出し破壊した。しかし、復興に向け日々の生活の安定を少しずつ取り戻しつつある現在、これら歴史の証人たちは、何物にも代えがたい自らの誇りやアイデンティティーの拠り所として再評価されつつある。衣食は足りても、それだけでは空しい。家族の絆とともに、自らの地域に誇れるものとは何だったのか。大震災が改めてそのことに気づかせてくれた。

その象徴のひとつ宮城県気仙沼市は、沿岸部の港町が根こそぎ破壊された。市民が親しんだランドマーク、漁師たちが港に帰還する目安の建物な

ども流出した。しかし、内湾海沿いに、ひときわ目立つ建物が倒壊したまま残っていた。1912年（大正元年）創業の老舗酒蔵「男山本店」の酒屋兼店舗である。その建物に、今年3月、米国ニューヨークの非営利団体・ワールド・モニメント財団から、復旧のためにと25万ドルの義捐金が出された。この財団は、大震災で壊滅的な打撃を受けた千葉県佐原地区の町屋再生のために20万ドルの支援をしたことでも知られている。

「慣れ親しんだ街並みの復興が地域の元気になる、地域社会の復興につながる」と考えた米国のNPOの発想は、古いものを次々と破却し、顔の見えない街並みをつくり続けてきたわが国のまちづくりに対する、ある種の警鐘とも受け取れる。

歴史（地域の記憶）を喪失したまちに未来はない。地域の未来図は、その地域の歴史の中に潜んでいる。東京大学名誉教授、故木村尚三郎先生の名言「振り返れば未来」に、今こそ私たちは立ち

返る必要があるのではないか。

そこで、本稿では、蔵など地域の歴史的建造物の活用とその手法について考えてみたい。個々の地域の事例については、本特集の地域事例をご参照頂くとして、ここでは特に観光交流資源としての蔵の価値や考え方について触れてみたい。

「観光まちづくり」からみた蔵の価値

【蔵の多様性と歴史的背景をみる】

一口に蔵といっても多様な用途・形態がある。土壁の外壁と漆喰で仕上げられた、いわゆる土蔵は、倉庫や保管庫として江戸時代以降、各地に数多く建てられた。その用途には保管庫機能のほか、店舗や住宅を兼ねて建てられるものもある。これらは、一般に「見世蔵」あるいは「店蔵」と呼ばれ、保管庫とは開口部の作り方や間取り・内装が異なっている。



運河沿いに並ぶ石蔵（小樽市）

蔵づくりの街並みで有名な川越（埼玉県）は、重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に指定され、蔵の集積エリアは観光交流の魅力的な空間となっている。また川越や倉敷と並び、日本の三大蔵のまちと言われる福島県喜多方市では、「蔵のひとつも持つ」というのが成人の証とされてきた。その積み重ねもあり現在4000を超える蔵が確認されている。まさに日本一の蔵のまちである。酒蔵をはじめ、見世蔵、座敷蔵、土蔵など多様な用途の蔵が、今なお生活の一部に溶け込んでいる。蔵には、土蔵だけでなく、近代以降、洋風建築を取り入れた石蔵や煉瓦蔵などが数多く建設された。「北のウォール街」と呼ばれた小樽は、1879年に国内3番目の鉄道の開通（手宮線）とともに、空知の石炭積出港、国際貿易港として栄え



明治の商家蔵をまちづくり拠点に（茨城県石岡市）

た。小樽運河を中心に小樽軟石と呼ばれる地元石材を使った銀行、商社などの建物や運河沿いに石蔵が集積した。1960年代の運河埋め立て論争後は、徹底した景観保全と都市デザインによるまちづくりを進め、国際的な観光交流都市としての地歩を築いた。

わが国の近代経済を支えた繊維と鉱山、その積み出しのための港湾都市などを中心に、赤煉瓦建物や倉庫も数多く建設された。シルクなどの輸出で栄えた横浜には、保税倉庫としての赤煉瓦倉庫や官庁・商館、外国人居留地など多彩な赤煉瓦建築が見られる。横浜との結び付きの強かった富岡製糸場（群馬県）や生糸の町として栄えた前橋、桐生などにも煉瓦建築の工場や蔵が数多く建てられた。同じく港湾都市として栄えた舞鶴や函館、

門司、日本初の機械式ホフマン輪窯の立地で「煉瓦のまち」と呼ばれた深谷などでも、赤煉瓦の美しい倉庫・建築物が今なお数多く残されている。

【蔵の活用と事業性の確保】

時代背景も用途も異なる蔵の活用には、多様な編集視点が不可欠である。蔵の活用事例の多くは、地域コミュニティ活動の拠点や情報拠点、まちづくりやボランティアガイドの拠点、あるいは地域の史料館等としての活用を図るケースが多い。

かつての常陸の国の国府、国分寺・国分尼寺跡が残る茨城県石岡市は、昭和初期の大火で駅周辺の建物の多くが焼失してしまった。しかし、江戸時代からの商家蔵と昭和初期に建設された多くの看板建築が残されている。町の中心にある古い商家蔵は、藍染め体験などができる観光拠点施設「まち蔵藍」として活用されている。近隣の酒蔵などとも連携した、歩くまちづくりの拠点施設として活用されている。

しかし蔵などの歴史施設の活用では、それ自体が自立できる事業化の工夫が不可欠である。道の駅のような地域産品・ブランド品の開発、これらを用いた特色のある「食」や観光プログラムの開発、有料ガイドの育成など、収益性の確保が大きな課題である。自治体や地域商工団体等による支援は必要だが、長い間、支援に慣れてしまうと、自立のための自助努力の芽を摘んでしまう虞もあることを肝に銘じるべきである。

蔵が集積し、「蔵のまち」などとして面活用できる場合は、それぞれの蔵の特色と事業性を高めながら、地域全体の景観・デザインに配慮した空

間演出により、観光交流エリアとして活かすことができる。先の喜多方や会津、倉敷、川越、栃木といったまちは、すでにこうした活用に使った手法を発揮している。問題は、蔵の所有者の事業が破綻し建物が売却されたり、街並みの一角に高層マンション計画がもちあがるなど、街並みを損ねる危機は常に生じる。会津若松では、こうした度重なる危機に、(株)まちづくり会津を組織化し、県・市の支援窓口とするとともに、建物外観を変えずに他用途への活用や投資を促すなど、地道な活動を続けている。街並みの整備はエンドレスの戦いでもある。

【蔵のネットワーク（連携）を活かす】

地域の蔵には、酒蔵のような共通の業種がネットワークした取り組みも盛んである。酒蔵などの食・飲料系の企業では、近年の酒蔵ツーリズム（産業観光のひとつ）が人気であり、土産品などの客単価も高いため投資回収が図りやすい。例えば、諏訪地域にある5蔵（諏訪5蔵）のネットワークでは、酒蔵パスポート発行による「飲み歩きプラン」や、その発展系として諏訪5蔵寄席、温泉巡りなどの企画を通じて、多くの観光客を受け入れている。

こうした酒蔵の活用に、観光庁も「酒蔵ツーリズム推進協議会」を創設し、各地の取り組み支援に乗り出した。具体的活動はこれからだが、地域ごとの酒蔵協議会などを対象に、これらの全国ネットワーク化とツーリズムの仕組みづくりの支援、訪日外客の送客などを模索している。すでに佐賀県の「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」や兵

庫県「はりま酒文化ツーリズム協議会」「バ酒ポート」で観光回遊をめざす北海道広域道産酒協議会などのほか、兵庫県灘や京都府伏見などの先進地の活動の連携を進めている。対象は日本酒だけでなく、ワインや焼酎なども含まれる。

【「生業」が観光になる】

居住用の蔵を除けば、その多くは「生業（なりわい）」と深く結びついている。小田原城の城下町として栄えた小田原市は提灯と蒲鉾がシンボルだが、干物、梅干し、鰹節、塩辛、和菓子、漬物、佃煮などの食材、木地挽き・ろくろ、寄木細工、漆、染め織、砂張（鋳物製品工房）など実に多彩な産業・生業が集積している。そして、これらの生業が、今も生き続けていることがこの地域の大きな



網問屋の建物を活用した「なりわい交流館」（小田原市）

強味でもある。

小田原の観光まちづくりは、この「なりわい」がさらに元気になること、そのなりわいをベースにした集客交流を目指すなかで、さらに新たな産業の創出と雇用拡大につなげるといった戦略である。具体的には、さまざまな店舗・工房を「街かど博物館」として、日々の商業活動拠点をそのまま観光交流の拠点とする。昭和初期の旧網問屋の建物を「なりわい交流館」として再整備し、観光案内や交流の中核拠点として活用している。「生業」はどの都市にも必ずある。郊外型の大型ショッピングセンターの立地などで苦境にたっているケースも多いが、なりわいの再生は地域活性化の重要な戦略である。

【「歩きたくなる」まちづくり】

「なりわいツーリズム」とも深く関係するが、これからの観光まちづくりで重要なことは、都市の中心エリアが「歩く・歩ける」環境、雰囲気をもっているか否かである。マストツーリズムの時代の観光は、著名な神社・仏閣や大自然、温泉地、大型テーマパークなどが対象となってきた。従って、市民が住む都市の中心部から観光地は隔離されているケースが多かった。

仮にどんなに観光地が優れていても、その母都市がゴーストタウンで活気がなければ、観光客は興ざめしてしまう。地域の生活に触れたり、地元の人々との交流・ふれあいが観光の大きな目的の一つとなっている今日、地域の生業を訪ね、まち中をブラブラ散策して地域らしさを実感してもらうことが大きな満足に繋がる。



足袋蔵を改装、まちづくり拠点となった蕎麦屋（埼玉県行田市）

いわゆる観光地ではないが、埼玉県行田市は、かつて足袋産業が栄え、今でも約70棟のユニークな足袋蔵が残っている。これらの蔵の活用を目的に、2004年に「NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」が発足した。その前年、解体予定であった店蔵・忠次郎蔵を再生し蕎麦屋を開業して活動の拠点とした。行田の蔵は土蔵から石蔵、煉瓦蔵など時代ごとに実に多様な蔵が存在するが、活動の大きな特色は、蔵の所有者と連携して、音楽や絵画、ギャラリーなどさまざまな活動を行う市民団体が、いわばアドプト（養子縁組）のような形で蔵の活用と管理を行っている点である。蔵は放置すればますます荒れる。蔵は個人の所有ながら、地域の共通景観として地域の共通財でもある。これを市民的ネットワークで活用し保全しようという

う発想である。

点在する蔵と地域商店などのマップを作成し、各蔵を結ぶルートを考案して年に数回、ウォーキングイベントも実施している。2008年に長崎で開催された「さるく博」は、まち中を歩くことが観光の大きな動機になることを立証したが、行田でもマップ片手にまちを歩き（遊サルク）、ガイドとともにテーマの深堀りをする（通さるくや学さるく）といった次の展開を模索している。

【街道・海道を活用した広域の蔵ネットワーク】

酒蔵はもとより、地域の産業の発展は、原材料や製品の搬出入などを支えた街道や海道、あるいは鉄道などの交通ネットワークと密接なつながりを持っている。近年は全国街道交流会議や北前船ネットワークのように、物産の集積地域や港を結ぶ広域ネットワークづくりが盛んである。山口県萩往還では、萩と山口、防府の街道沿いの都市・首長が連携した街道観光を推進している。北前船ネットワークでは、かつての北前船寄港地の都市が、海道を通じて連携し、それぞれの地域の物産などを足掛かりとした観光交流を促進している。瀬戸内海沿いの各県では、かつてトーマスクックやシーボルトなどが絶賛した瀬戸内海の景観を活用し、訪日観光客の第2デスティネーションの核として「エメラルドルート（海道）」をテーマとした広域連携活動も活発化している。

おわりに

（蔵のあるまちの魅力をどう活かすか）

蔵のある町の魅力について触れてきたが、最後

にまとめを兼ねて2点ふれておきたい。

一つは、「まちづくり」という視点である。これまでの「まちづくり」の用語には、都市再開発や駅前整備といったハード事業のイメージが強かった。時代とともに都市は変遷するので、時代時代の「まちづくり」は不可欠ではあるが、いま私たちに求められているのは、蔵や路地、掘割や旧街道など、地域が長い時間をかけて大切にしてきた資源を、今の私たちがしっかりと守り使い込んでいくという「まちづくり」の思想である。欧州では小さな田舎町にいくほど、自分たちのまちに誇りをもち、競い合うように町の美を磨いている。こうした田舎町にでかけて私たちが感動するのは、まさに町の人々の「まちづくり」への取り組みや心ではないか。

2つ目は、地域の蔵は食文化と密接なつながりを持っている。その繋がりを意識的に再生し高度化することが、地域の付加価値を高める重要な手法である。食の宝庫といわれる北海道は、食文化の顔であるシェフやソムリエと生産農家や漁家などが結び、地域全体を食のクラスター（食クラ）によって高度化しようという試みを進めている。全国の酒蔵で、食材とシェフ、地域らしい食器、ハレの日の祭りや食の場づくりなど、いわば酒蔵を活用した「酒クラスター（酒蔵）」の事業化が図れないか。これまで分断されていた地域のさまざまな資源を酒や食文化、これらを象徴する蔵などの「場」で結び、高付加価値化によって地域の活性化を図る。この新たな試みに大いに期待したい。

蔵の街、音・水・緑の街づくり

— 中心市街地の活性化をめざして —



株式会社黒船代表取締役社長 ● 亀井 祐一

奥州市の概要

平成18年2月20日に旧「江刺市」「水沢市」「前沢町」「胆沢町」「衣川村」が合併して奥州市が誕生した。岩手県の内陸南部に位置する人口12万4700人（平成25年1月31日現在）の県内でも代表的な農業地帯であり、江刺金札米、江刺りんご、前沢牛など全国的に有名な農産物を生産している。

また工業、商業の集積も進んでおり、農・工・商のバランスがとれた産業基盤が特徴であるが、「ライフスタイルの変化」「意識・価値観の変化」「居住の郊外化」「郊外大型店の進出」などにより、中心市街地の商業機能が衰退傾向にあり、街中の求心力が低下している。

蔵町モール

奥州市の北東部に位置する江刺区岩谷堂地区は

江戸時代まで伊達藩の統治下にあり、藩の最北端の要地として城下町が形成され、北上川の舟運による物資の集散地として繁栄した。

商人の町として栄え、農作物や酒を貯蔵するため、また火災から家財を守るため多くの「蔵」がつけられ、その隆盛を偲ばせる「蔵」が現在でも中心市街地に137棟残されている。

岩谷堂地区の商店街では、多くの商店でほぼ表通りに面して店舗、その後ろか店舗の二階に母屋、そのまた後ろに「蔵」という順序に連なり、敷地は一樣に細長く、双方の街を結ぶ路地裏は、どちらを見ても「蔵」ばかりという眺めになる。

その蔵を表通りに移設したり、使用していない蔵を店舗として活用しているのが蔵町モールを中心とした岩谷堂地区の商店街である。

蔵町モールは平成15年に旧江刺市が整備した石畳みの歩行者専用道路であり、モールを中心に年間を通じて「蔵まち市、水曜市」や「屋台村」などが開かれ、郷土芸能などのイベントも開催されている。

蔵を生かしたまちづくり

平成5年に岩谷堂地区の中町振興会と商店会が「中町まちづくり委員会」を結成し、点在する蔵の保存・活用と街並み整備への取り組みがはじまった。

平成6年に「中町まちづくり協定（新築、増改築時の建物の意匠・形態に関するルール）」が結ばれ、新増築に際しては軒高を3メートル以内とし、屋根の形は和風調、色は蔵とマッチした白色と黒色や茶色を基調とした和風感のあるものとする取り決めがされた。この協定は当時の自治会長自らが汗を流し数年がかりで住民の同意を得て実現した。

「江刺市中心市街地活性化基本計画」が策定された平成12年からは、行政や株式会社黒船などの連携により、蔵を改造した店舗整備やイベントなど約40の事業を実施して、中心市街地の「個性の創出・街中の回遊性の向上」に取り組んできた。

平成13年には、「ふるさとの川モデル河川整備事業（国交省）」により中心市街地に隣接する人首川の整備が行われ、触れ合いの水辺空間づくりと中心市街地のまちづくりが一体となり、市民の憩いの場となっている。

また、戦時中疎開していた劇作家・菊田一夫が岩谷堂共立病院（現在は明治記念館）をモチーフに作詞したとされる「とんがり帽子」のオルゴールの音が同記念館から蔵のまちに流れ、「水、音、緑のまち」を演出している。

まちづくり会社・黒船

(社) 江刺青年会議所OBが中心となり、中心市街地の活性化には「まちの歴史と文化資産」である「蔵」の活用以外にはないと考え、平成9年に「株式会社黒船」を設立し、街の再生に向けて地域主導による本格的な事業をスタートさせた。

活動のひとつとして、「蔵」を生かした環境整備と解体される予定だった「蔵」を保存し活用することを通して、街中経済の活性化に寄与する街づくりガイドライン「黒船百年計画」を策定した。



「蔵まち市」で郷土芸能を披露する様子

平成7年には、NHKの大河ドラマ「秀吉」のロケが地元で行われたのを契機に、滋賀県長浜市の「株式会社黒壁」との連携もはじまり、平成10年4月29日には街の中心部にシンボルとなる施設として「黒壁ガラス館」がオープンした。

ガラスをテーマとしたのは、歴史性、文化芸術性、国際性という考えを満たし、「蔵」という伝統的な雰囲気と調和しつつ既存商店と競合せず、地元で不足している業種・業態の導入を図ることにあった。現在は黒船の直営店としてガラス製品の販売とオルゴール販売を中心に営業している。

平成18年6月28日には、地産地消がテーマの公設民営レストラン「蔵まち郷土食財館」もオープンし、郷土の良質な農畜産物を活用した名物料理の創作などにも取り組んでいる。

それ以降も日用雑貨販売店や飲食店などがオープンしており、蔵の集積がしだいに進み、街並み



公設民営レストランの「蔵まち郷土食財館」

形成とともに「蔵を生かしたまちづくり」の波及効果が現れてきている。

個性あるまちづくりを

今後は蔵の活用を一層進めるとともに、中心市街地をひとつのテーマパークのように見立て、気持ちよく散歩したり、滞在したりして、楽しめるような「楽しい生活空間」づくりを目指し、市内の観光施設などとも連携した観光ルートづくりをしていきたいと考えている。

また、「蔵」の補修改修が資金的な面からなかなか進まないことが、大きな課題となっているが、まちづくり会社としての財政基盤を確立させつつ、一步一步、蔵の整備や活用を進めるために、その蔵に魅力のある店舗やチャレンジショップのような店舗の入居を企画して「蔵まちモール」を展開させていく方針だ。

市町村合併により、中心市街地が複数存在する奥州市の中で、江刺区の持っている歴史や伝統、文化、コミュニティ等を大切にしながら、今後も引き続き「個性」のある街づくりを目指していきたい。

観光振興に向けて「蔵」を活用

―官・民・学が連携し、まちづくり―



喜多方市建設部まちづくり課

● 遠藤 実

喜多方市の概況

喜多方市は、福島県の北西部、会津盆地の北に位置し、北は世界遺産の国内候補地に挙げられた飯豊連峰の雄大な山並みが連なり、東に名峰磐梯山の頂を望む雄国山麓が裾野を広げる豊かな自然に恵まれた風光明媚なまちです。

本市の一带は、会津の北方に位置していたことから、古来、北方（きたかた）と称され、江戸時代には、会津藩の領地となっていました。明治以降、小さな集落を合わせて町や村が形成され、昭和20年代後半から30年代にかけて、町村合併法により複数の市町村が形成されました。

これらのうち、喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町及び高郷村の5つの市町村が平成18年1月4日に合併し、新しい喜多方市が誕生しました。

「蔵のまち喜多方」が定着するまで

昭和40年代の後半、老朽化や作業効率向上のため、次々に壊されていく「蔵」に一抹の寂しさを感じた写真家の金田実氏（故人）が、写真を通して喜多方の文化遺産を後世に残そうと蔵を撮り続け、昭和47年11月に市内で写真展を開催し、翌年に会津若松市で、翌々年には東京での開催と回を重ねるごとに見る人に大きな感動を与え、次第に「蔵のまち喜多方」が知られるようになっていきました。

さらに、昭和50年7月7日には、NHK総合テレビ「新日本紀行」蔵ずまいの町」が全国に放映されたことにより、「蔵のまち喜多方」



甲斐本家座敷蔵。住居用に造られた蔵の代表例



古い蔵をレストランに改装した蔵見世

多様な喜多方の蔵

の名は高まり、この頃から、市内にはキャンバスやカメラをさげた観光客の姿が見られるようになりました。

市内には、4100棟あまりの蔵が散在しています。粗壁、白漆喰、黒漆喰、洋館風を感じさせるレンガ造りの蔵まで様々です。また、用途も多岐にわたり、酒蔵、漆器蔵、味噌蔵、家財蔵、店蔵、座敷（住居）蔵、お寺までが蔵造りとなっています。中には防火壁を兼ねた塀蔵、果ては厠（かわやトイレ）蔵まであります。このように喜多方の蔵の特徴は、その工法と用途の多様性にあります。

まちづくり協議会の設立

今では、蔵とラーメンのまちとして全国的にも名が知られている喜多方市ですが、近年、「蔵のまち」が観光に占めるウエートが徐々に低下しており、滞在時間や経済波及効果の減少という問題だけでなく、重要な地域資源である蔵の利活用や保全にも悪影響を与えているのが現状です。

こうした状況下、喜多方の市街地の一部区域において、空き蔵の利活用やイベントの実施を通じて、地域の活性化を図ろうとするまちづくり団体の試みが散見されるようになって来ました。

しかし、こうした団体と他のまちづくり組織の間には、相互の連携や情報交換の場がほとんどなく、各々の団体の活動水準に隔たりが見られたり、



観光客の休憩所として利用されている蔵テラス

活動の方向性が各様であったりという課題がありました。その結果、蔵などの地域資源を活用したまちづくりの成功例も一部の限定的なものにとどまり、市街地全域への波及が進んでいないのが現状でした。

そのような中、平成18年7月には「喜多方蔵のまちづくり協議会」（現在は喜多方まちづくり協議会に改称）が官・民・学の各種団体が連携して発足しました。

同協議会は、顕著な活動を展開しているまちづくり団体の成功事例の共有、空き蔵の利活用や散策ルートのプロモーションなどの実地活動、他の地域から講師を招いての研修会などを通じて、参加者の知識やスキルを高め、個々の団体においてリーダーとなりうる人材や地域間交流の担い手となる人材を育成することを目的としています。

また、主に観光の視点から市街地全域を見据えたまちづくりビジョンについて議論を深めることにより、各団体間の連携を促すと同時に、市民が主体となったまちづくり活動が市街地全域にわたってバランスよく展開されることも狙いとしています。

こうして同協議会は発足以降、さまざまな蔵を生かしたまちづくりに取り組み、平成20、21年に実施した「地方の元気再生事業」（内閣府所管）では、「実施状況」「実施体制」「効果」「継続展開の見込み」の4つの要素に加え、「先導性・モデル性」などの選定基準から最優良の評価をいただきました。

「地方の元気再生事業」は次のような内容となっています。

取り組みテーマ		実施主体
蔵風景のあるまちづくりプロジェクト		喜多方蔵の会
常設写真展の開催		喜多方蔵の会
景観モデル地区指定支援		会津北方小田付郷町衆会
まちづくりモデルプラン策定		市役所通りを良くする会
蔵のことは「喜多方」に聞けプロジェクト		
蔵のまちづくりセンター創設		NPO法人 まちづくり喜多方
蔵の利活用の促進		喜多方蔵の会
伝統工法の継承支援		喜多方蔵の会
蔵情報データベースの整備		NPO法人 まちづくり喜多方
魅力ある喜多方観光・産業創出プロジェクト		喜多方蔵の会
喜多方流観光の魅力創出発信		喜多方観光協会
蔵を活用した宿泊拠点の魅力創出		会津喜多方商工会議所 喜多方蔵の会
発酵醸造など微生物を応用した産業の創出		喜多方観光協会 会津喜多方商工会議所

今後の課題

喜多方では長年にわたって「蔵を生かしたまちづくり」に取り組んできましたが、特に平成12年以降のまちづくり活動は盛り上がりを見せ、平成21年にはNPO法人によって「喜多方蔵のまちづくりセンター」（現在は喜多方まちづくりセンターに改称）というコンサルティング組織が立ち上げられるなど、まちづくり活動の強化を目指しています。

蔵の所有には高額な維持費が必要となることから、資金面での補助等が望まれています。市の財政も厳しいことから、限られた財源の中で効果的に蔵の保存を進めていく仕組みづくりが課題です。

酒蔵を改装した「街の映画館」 —「深谷シネマ」、コミュニティ再生の核に—



特定非営利活動法人市民シアター・エフ理事長

● 竹石研二

野菜王国・深谷

深谷市は埼玉県北部に位置し、2005年に隣接する岡部町・花園町・川本町と合併した人口14万7千人の地方都市。JR高崎線で上野から1時間半ほどで、そこには「東京駅」に似た駅舎がある。

ここは日本の近代産業の父、渋沢栄一の生誕の地でもある。

深谷市は「深谷ネギ」をはじめとする野菜王国で、近年は「花卉」（ユリ・チューリップ）栽培にも力を入れている。農業のほか、商業・工業のバランスも取れた温暖な地域である。旧中仙道沿いに商店街が並んでいるが、年々空洞化が進行し、かろうじてレンガと瓦の倉庫が残り、昭和のレトロな雰囲気が保たれている。

旧銀行を改装し映画館オープン

2000年4月に「映画文化の振興とまちづくり」を目的としたNPO法人市民シアター・エフを市民有志で立ち上げた。

2001年には中心市街地活性化を目的に深谷TMO（深谷市や商工会議所など官民一体のまちづくり組織）の構想にNPOとして参加し、「空き店舗活用ミニシアター」を提案した。

翌2002年7月、この提案が実を結び、商店街にあった「旧銀行」を改装した「深谷シネマ」（50席）がオープンした。深谷では30年ぶりの映画館復活だった。

銀行なので何んと「金庫室」を「映写室」にした。建物の改装費はTMOの補助金で、あとの設備（映写機・音響・スクリーン・イスなど）はすべて中古品を集め、資金は市民から「シネマ基金」を募った。このように、「深谷シネマ」はNPOと行政と商工会議所によるみんなの「街の映画館」として誕生した。

この映画館の誕生を機に、その後、「花の街ぶかや映画祭」や「ふかやFC（フィルムコミッション）」の活動、映画館のない地域での「映画会」開催などの事業を展開した。

深谷シネマは当初2、3年は赤字だったが、口コミでその存在が知られるようになり、数年後には年間3万人の観客が訪れるなど経営も安定してきた。しかし、その矢先、リーマンショックで約3割の来場者減となり、赤字が続いた。さらに追い討ちをかけるように区画整理事業による移転の話が舞い込んできた。

「旧七ツ梅酒造跡」にお引越し

やむなく街なかの移転先を探していた時、撮影などで使っていた酒造跡「旧七ツ梅酒造」のオー



銀行を改装した旧・深谷シネマ



酒蔵を改修して映画館にする際の起工式

ナーと出会い、お互いの思惑が一致し、一番朽ちていた「西酒蔵」を改装して「新・深谷シネマ」とすることになった。

2009年度の経済産業省の補助金をNPOで申請し、朽ちた「西酒蔵」を改装した「新・深谷シネマ」が2010年4月にリニューアルオープンした。この改装にあたって、市民から約1千万円の寄付が寄せられた。

この頃を振り返ると、経営は赤字続きで、寄付も思うように集まらず不安な日々が続いた。しかし、1日、1日と出来上がる「新・深谷シネマ」を見ると元気が出てきた。

そして、ついに新しい映画館が完成し、同年4月16日、小雨の中、関係者をお招きして完成披露

パーティーを行った。劇場内では名誉館長である映画作家・大林宣彦さんの作品を上映し、大林さんの心温まるスピーチも頂いた。

しかし、移転の翌年3月に東日本大震災が起きた。「どこのお店に行っても商品がなく、行くところがないよ」と高齢者の方が「街の映画館」を訪ねてくれた。そして2013年に入って、ようやく「いい作品」に恵まれ、多くの観客が来場してくれている。

◆ ◆ ◆ コミュニティの再生に向けて

「深谷シネマ」を核にして、旧七ッ梅内に新たなお店がオープンしている。「とうふ工房」「古書



現在の深谷シネマの内部

店」「カフェ」「瓦職人の工房」「寺子屋」「ギャラリ」など、ちょっとした七ッ梅横丁だ。この七ッ梅全体（900坪）の管理運営は市民が立ち上げた「（一社）まち遺（のこ）し深谷」が行っている。

現在、街なかでは区画整理事業が進行している。旧中仙道（現在、幅員8メートルの道路）が両サイド4メートルずつ拡張される。このため100年以上続く歴史ある店舗や、「蔵」などが姿を消すことになる。

しかし、1年前に市の都市計画課による市民ワークショップが開催され、それを機に市民組織「ぶりっこくらぶ」（レンガのブリックにあやかった名称）が立ち上がり、行政と市民の協働のまちづくりがスタートした。手始めの事業は「たなごっこ」という、街なかの空き家・空き店舗の調査と活用をすすめる事業だ。

これらを後押しするために、関係団体が連携して平成25年度の経産省コミュニティ再生補助金の申請を準備している。

市民が主体となって、街なかをだれでもが楽しく集えて安心なエリア（「商店街」から「生活街」へと、深谷のまち遺しの活動は日々続いていく。そして酒蔵を改修したこの「深谷シネマ」が世界の名画と出会え、誰もが楽しく集える街の中心施設になることを願っている。

酒蔵を中心に「発酵の里」づくり

—千葉県一小さな町で関東最大規模の酒蔵まつり—



千葉県神崎町まちづくり課

● 石橋正彦

神崎町は千葉県の北東部利根川沿いに位置し、面積は19・85平方^キロ、人口約6500人の千葉県で最も人口が少ない自治体です。基幹産業は米を主体とした農業で、人口も減少傾向にあり、かつては外客の姿を目にすることも稀な状況でした。

◆◆◆ 最盛期には7軒の蔵元

神崎町は、利根川水系の肥沃な土壌がもたらした水稲と、良質で豊富な水の恵みにより、古くから酒の醸造をはじめとした発酵産業が盛んな町でした。最盛期には半径約500メートル程度の狭小な範囲に7軒の蔵元が軒を連ね、味噌や醤油も競って作られており、江戸という大消費地を背景とした利根川舟運の要衝として、現在商店街を形成している河岸の街道は、大いに賑わいを見せていました。しかしながら、時代の変遷とともに賑わっていた街は過去のものとなり、年々シャッターを下ろす商店が増えていくような状況でし

た。

◆◆◆ 住民巻き込んで酒蔵祭り

現在でも神崎町内には鍋店（株）と（株）寺田本家の2軒の酒蔵が江戸時代から300年以上にわたり醸造を続けており、各々の酒蔵敷地内でお祭りを行っていました。

きっかけは5年前。私の携帯電話に中学時代の同級生から電話がありました。内容は鍋店さんからの依頼で、蔵祭りを町のイベントと併せて行いたいという旨のものでした。この電話が始まりとなって、鍋店さんと町で協議を重ねる中で、各々の酒蔵のお祭りを同時開催する案が持ち上がり、2軒の酒蔵を中心として、商工会や地元の小工業者・周辺住民も巻き込んで「発

酵の里こうごき酒蔵まつり」を開催する運びとなりました。

◆◆◆ 人口の7倍の来場者、賑わい戻る

初年度は寺田本家前の町道を歩行者天国として開催し、当初5千人程度と見込んでいた入出を大きく上回る約2万人の来客がありました。予想を大きく上回る来客があったことから、普段は閑散とした道路が見たことのない大渋滞に見舞われ、会場となった歩行者天国の町道は前に進むこともできないほどの人で溢れかえっていたことを記憶しています。

2回目以降は現在行っている状況と同様な形態で実施するようになり、2軒の酒蔵のお祭りを中心として、酒蔵の周辺街道延長約1^キロに及ぶ国道・町道を歩行者天国として交通閉鎖し、既存商店も含め発酵食品や地元農産物をはじめとした200



来場者で埋め尽くされた国道の様子



人気の発酵足湯。おがくずや糠を混ぜて発酵させ、足湯として利用する



町のキャラクター「なんじゃもん」。今年の酒蔵まつりで初めて披露された

以上の店舗が軒を並べるようになりました。

酒蔵見学や30種類以上の無料試飲・当日限定酒の販売のほか、酒蔵内及び歩行者天国内の路上に計4カ所のステージが設置され、祭り囃子の演奏、歌や踊りなど各所で様々な催しが行われました。最盛期7軒の酒蔵が軒を並べた街全体が会場となり、当日は舟運華やかなりしかつての賑わいが呼び戻されるようになりました。

人も年々増加し、本年3月17日に開催された酒蔵祭りでは、町の人口の約7倍である4万5千人もの来場者がありました。当日は天候にも恵まれ、発酵食品や地元産品・オーガニックな物品を

販売する店舗などが並んだ歩行者天国を、大勢の人々が散策し買い物を楽しみ、酒蔵の見学や試飲などのコーナーには長蛇の列ができていました。また、女形の花魁道中が会場内を練り歩き、当初のお披露目となった町のキャラクター「なんじゃもん」も登場し、祭りに華を添えました。

◆「発酵の里こうざき」をキャッチフレーズに

この事業がきっかけとなり、神崎町は「発酵の里こうざき」としてまちづくりを進めるようになり、今までシャッターを下ろす店舗が増える一方

であった街中に、地元産大豆を原料とした豆腐店や酒粕自然酵母を使ったパンを焼くパン屋など、新規出店も見られるようになってきました。使わなくなつて久しい役場の旧庁舎の雨漏り等を修繕し、毎週金曜日には「金曜夕市」を開催。地元の新鮮野菜や発酵食品などを取り扱い、多くの人が訪れる町の名物にもなりました。

また、新聞やテレビ等のメディアにも取り上げられたことから、対外的にも本町が「発酵の里こうざき」として認識されるようになり、本年1月には、過去4回主に東北地方を中心に開催されていた「全国発酵食品サミット」を、関東で初めて本町で開催するに至りました。当日は発酵学者小泉武夫先生をお招きし、全国や町内の発酵物産展・料理教室等も併せて開催。「発酵」をキーワードとしてまちづくりを進める自治体や団体の方々が全国各地からお越しになりました。

現在「発酵の里こうざき」のキャッチフレーズを商標登録出願中であり、町の商工観光振興の趣旨に合致した商品や産品を認定し、販売することにより、町の「発酵の里」としてのイメージの確立や、産品の差別化・「発酵の里」のロゴを付した産品の流通による町の情報発信を進められるよう事業を展開しています。

旅先で「あなたの地元はどこですか」と問われ、「千葉県の神崎町です」と返答した際に、「ああ、発酵の里ですね」と言われるようなまちづくりを進めていきたいと思っています。

廻船問屋の町屋と土蔵を生かし町並み再生

—まちづくり会社も設立—

梼田酒造店社長 ● 梼田隆一郎

明治以前に創業した約3千社のうち造り酒屋は約500社と一番多い。「日本」という名詞を冠した酒を造り、民間サイドで文化、歴史を一番繋いでいるのも造り酒屋であると思われる。

当社の蔵の位置する富山市の東岩瀬町は古くは延喜式に駅として、室町時代には「廻船式目」3津7湊の一つに「越中岩瀬湊」として登場する。

現在の街並みは明治初期の大火のあとに再建された北前船の廻船問屋の町屋と土蔵が多数戦火を逃れ残っている。

フランスのワイナリー巡りが転機に

かつては賑わっていた東岩瀬町も私が蔵に戻った平成4年ごろには急速に過疎化し、商店街もほぼなくなり、空き家や崩壊寸前の土蔵が多く見られた。幸い当蔵には吟醸ブームのおかげでかなり県内外より来客が多く、なんとなく日々忙しくしていた。

転機は平成7年にフランスのワイナリーを巡る

旅をした事から訪れる。

以前にも海外はよく行く機会があり、日本に帰ると「なんて日本は写真にならない街並みなんだろう。日本人の感性は素晴らしいのに」と嘆いていたが、自分自身が率先して何かをやるべきだとの思いは強くなかった。

ボルドー、ブルゴーニュ、シャンパーニュとワイナリーを自分でまわり、打ちのめされたように感じた。「楽しい」「美しい」「美味しい」。

当時、残念ながら日本酒の蔵はホスピタリティが欠如し、美しくなく、雑然とし、主義主張が薄く、文化性が乏しく、「こんなじゃワインに勝てない」「これでは外国人に誇れない」といった感じであった。

私は造り酒屋で本拠地を動かせず、こんなつまらないところで一生欲求不満で人生をすごすのも寂しいので、自分で出来ることから、なにか良くしたいとの思いがわいてきた。

強く望めば流れが舞い込んでくるもので、まずちようど当社の蔵の前に、昭和の初期に建てられ

た材木問屋の質の高い建物が空き家になり、これを改装して蕎麦屋を造った。イタリアらしさが素晴らしい嬉しいピザ屋のイメージのように、千円で「日本もいいな。楽しく美があり、日本酒もこんなに旨い」と感じられる店が造りたいと思い、土壁の美しさを強く意識して改装した。

粹な良い蕎麦屋は知的好奇心のある人を引き付ける魅力があるようで、岩瀬に来たことがない方々が大勢岩瀬に訪れるきっかけになった。そして、これが郷土の魅力を再認識する機会ともなった。

大きな土蔵を再生、賑わい空間に

蕎麦屋を造ってからしばらくして間口5間奥行き30間の大きな土蔵が壊されそうになった。所有者は残念ながら、維持費が高く、修理も出来ず、行政に持ちかけたが断られ、縁があり当社が取得し、再生することになった。

再生はまず基礎を持ち上げ、栗の木で土台を造り、並行して土壁用に土と藁を刻み混ぜ、発酵させ泥団子を造り、竹と縄で網目状に造ったコマイにぶつけていく。

作業には地元の幼稚園や小学校の子供たちも授業で参加してもらった。土蔵の再生は泥の冷たい感覚と臭い匂いのため、子供たちには忘れられない体験のようだ。

この工事は3年ほどかかり、かなりマスコミにも取り上げられた。なにか人々の気持ちを捉える力が土蔵にはあるようである。

完成した土蔵は、1万本ほどのお酒が並ぶ酒屋



再生前の土蔵の内部



土壁用の泥団子をつくる女性



整備された町屋

また我々が本当に日本の良さを理解しているかという問題もある。よく欧米人に日本人は日本の美を大事にしていけないとの指摘を受ける。もともと日本人の美意識は優れたものがあると信じているが、美の追求を心にかけている日本人がどのくらいいるのだろうか。我々が率先して日本の美を再認識し、子供たちの時代にも世界に誇れるように行動していきたいものである。

さん、そのお酒を持ち込み楽しむフレンチレストラン、ガラスの工房、陶芸の工房、宴会スペース（中庭を利用）などに使われているが、土蔵ののびのびした空間が日々、人々で賑わっている。

この土蔵の中のガラス工房の安田泰三さんは、東岩瀬町の大きな元廻船問屋を改装し、自宅として引っ越してきてくれた。富山市はガラス工芸に力を入れており、彼も富山ガラス工房の卒業生であるが、卒業生は富山に定住して工房を開くケースが少なかったものの、彼の成功で、これに続く作家がぞくぞく生まれ出した。

土蔵の中の陶芸家の積永岳さんも大きな町家を改装して自宅として引っ越してきてくれた。ここまできると流れができ、彫刻家の岩崎努氏が古い和洋折衷の町家に入ってくれ、蒔絵師、木工家具店、画家、大工さんなどが空き家を改装して集まってきた。それぞれ愉快な人々で、よく集まり一杯飲むが、個性がぶつかりあい、毎回、刺激にみちた時間はなによりの楽しみである。

「岩瀬まちづくり株式会社」を設立

どこの古い町も同じだと思われるが、岩瀬は貸地が多く、さらに家の底地を複数の地主が所有して建て替えが難しく、郊外の新興住宅地に引っ越す家が多く、空き家問題が顕在化してきた。そこで2006年に「岩瀬まちづくり株式会社」を立ち上げ、不在地主の土地を買い取る事業を始めた。

土地の時価ではなく地代収入から計算した土地の価値で買い取り、権利の調整をして販売時は借地権を加味し路線価の半分で販売している。そこでの収益を元にさらに古い廻船問屋の買い取り、修景、販売または賃貸を行っている。

岩瀬まちづくり株式会社が行う事業は、張りぼてではない事、日本も美しいと再認出来る事、そして日本酒の宴会が楽しめるスペースを作ることであるが、一番大事に思うことは誰のための、何のための事業か、である。

私にとつての優先順位はまず家族、ほぼ同じく日本酒の振興、さらに私のまわりにいる人々の幸せである。今の岩瀬では観光振興や来客増などにはあまり考えていない。町にはそれぞれキャパシティと役割、向き不向きがあると考えるが、小じんまりした岩瀬には少数の質の良い来客があれば私達には充分である。

しかし、次のステップや転機があれば変わることもありえる。

日本の良さを大切に

現在、日本酒はかなり世界でのマーケットが広がってきており、海外から宴席に呼ばれることも多くなった。

国内だけでは良いかもしれないが、世界で戦うには世界から尊敬をあつめることが肝心になる。相手の宗教、習慣を理解するように努力するのは大事なことで、例えばキリスト教徒の聖なる日クリスマスなどを異教徒が意味なくお祭り気分ですら祝うなど相手の宗教への無理解は好ましくない。

蔵の街並みを大学のキャンパスに —歴史的建物を授業に活用、再生計画も提案—



須坂市まちづくり推進部まちづくり課 課長

● 滝沢健一

製糸産業が近代化に貢献

須坂市は、長野県の北部、長野市と千曲川を挟んで東側、善光寺平の東北部に位置しており、人口5万2600人の市です。電子機械業などの製造業が盛んで、農業はりんご、ぶどうなどの果樹栽培が中心です。

須坂は名前のとおり坂の町です。上信越高原の山々からの豊富な水が扇状地の坂を下り、屋敷の中を流れる裏川用水を利用して水車を掛け、その動力を使い、明治から昭和初期にかけて製糸産業で栄えました。

須坂の品質が良い生糸は、横浜からアメリカ等へ輸出され、その製糸産業は須坂の近代化に大きく貢献しました。また、製糸産業が盛んな頃に建てられた土蔵づくりの三階建てのまゆ蔵や門構えをもつ町屋などが今も残されています。

蔵づくりの建物の現状

市の中心市街地では、昭和63年に「日本ナショナルトラスト」、平成元年に「伝統的建造物群保存対策調査」を行い、歴史的建造物が347棟あり、そのうち、土蔵造りの建造物は200軒以上あるとの調査結果が出ました。

これらの調査結果を受け、市民の間にも歴史的建造物の保存運動が高まり、平成5年より市単独で、平成7年からは国交省の街並み環境整備事業を導入し、平成21年までに194件の建物等の修理・修景を行い、蔵造りの街並みを復活させてきました。

ただ、平成22年に行った調査では、修理・修景事業を活用しなかった建物を中心に、以前調査した歴史的建物の約半数が取り壊されていることがわかりました。

蔵の街並みキャンパス事業

須坂市には、現在4つの高校がありますが、大学がないことから、平成17年に、「産・学・官・民」の協働により、若者が集い交流が生まれ、21世紀を担う知の創出と発信の地とすることを目的とした「蔵の街並みキャンパス」構想を策定し、須坂の街を大学のキャンパスとして利用していただくとともに、町の賑わい創出にもつなげていく事業を行っています。

平成18年度から本格的に事業に着手し、当初の参加大学は、長野市にある信州大学工学部、教育学部、長野県短期大学、長野工業高等専門学校、清泉女子学院大学でしたが、平成22年度からは、新



蔵を見学する大学生



学生による建物調査の様子



「蔵の街並みキャンパス事業」の成果発表会

くか、若い学生の皆さんの感覚が重要になります。

また、建築学科の皆さんは、市で取得した歴史的建物などの調査も行っています。

一方、文化学園大学、東京工科大学の皆さんは古民

家をお借りし、その建物で合宿しながら自分たちで少しずつ改修し、地域住民との交流や農作業体験を行っているほか、平成24年には古民家の保存などをテーマとするワークショップも実施しました。

これら蔵の街並みキャンパス事業については、毎年2月に成果発表会という形で市民にも知っていただく機会を設けています。

◆◆◆ 今後の課題

蔵の街並みキャンパスの取り組みは、学生の皆さんに須坂市を知っていただく良い機会となっております。

学生と市民が現場でふれあい、交流することにより、改めて自分たちが住んでいる町の良さを再認識できるという意見をお聞きます。今後も、市民の皆さんにもっとこの取り組みを知り、参加していただきたいと考えています。

また、学生の皆様からの建物の活用案などは、なかなか実現することは難しい点もありますが、私たちににとっては思いもかけない発想に考えさせられるものがあります。大学のない市ですが、ないからこそ、この事業ができたのではないかと思います。

今後は、事業に関わっている大学間の連携強化や学生の提言等を市の施策へ反映させるような取り組みを推進し、須坂市の貴重な地域資源である蔵の街並みを「産・学・官・民」の協働により地域の活性化、街のにぎわい創出につなげていきたいと考えています。

たに東京都にある文化女子大学（現在、文化学園大学）、東京工科大学にも参加いただきました。

事業実施に当たっては、市の負担金のほか市内企業の寄付金を充てています。また、商店街や地域の皆様のご協力をいただき、延べ千人を超える学生が毎年、この事業に参加し、町の賑わい創出の一助になっています。

◆◆◆ 歴史的な建物を授業に活用

前述のように、この蔵の街並みキャンパスの目的のひとつに、須坂の街をキャンパスとして利用していただくことがあります。

市内に残る蔵や町屋の建物、歴史的な街並みを大学などの授業に取り上げていただいております、長野工業高等専門学校の皆さんは、蔵造りの残る街

並みを見学し、須坂の街並みに合った住宅を提案。さらに、ほかの大学の学生も須坂の歴史的な街並みや蔵造りの建物を活用した施設などを見学しています。

特に信州大学工学部建築学科の皆さんには、市内に残る建物をお借りし、内部を詳細に調査し、平面図、立面図をはじめ構造図などの図面や、構造模型の作成、それを基にした「民家の再生」、また、歴史的街並みの残る街区を対象にした「街区の再生」の授業に平成18年から取り組んでいたいています。

当初は、市で取得した建物を題材にしていましたが、3年目からは、個人所有の建物をお借りし、内部調査を行いながら再生計画を提案してもらっています。この授業では、それぞれの題材に対し、建物、街並みをどう再生するか、どう活用していく

ドラマのロケを契機に味噌蔵周辺を整備 —観光客も増加、趣きのある景観に—

愛知県岡崎市経済振興部観光課 課長 ● 廣山嘉也

「八丁味噌」のまち

愛知県中央部に位置する岡崎市は、古くは鎌倉街道が通り、また江戸時代には東海道五十三次の「藤川」と「岡崎」の2宿を持つなど、歴史的な交通の要衝です。そのため、今でも神社・仏閣・遺構などが多数残る歴史遺産の街となっています。歴史の中で本市の一番の誇りは、徳川家康公の生誕地であることです。春の桜まつりには家康行列を実施し、また家康公が生まれた岡崎城のある岡崎公園では、甲冑姿のグレート家康公「葵」武将隊が、来園者に毎日おもてなしをしています。また家康公が亡くなられ400年にあたる平成27年には、家康公顕彰四百年記念事業として、家康公ゆかりの岡崎市、静岡市、浜松市の3市で様々な催しを開催する予定です。

このように本市では、家康公を観光の中心に据え、事業展開をしているところです。そしてここ岡崎市には、家康公とは切っても切

れないものがあります。それは赤褐色で濃厚な味わいが特徴の「八丁味噌」です。

岡崎城から西に八丁（870^{メートル}）離れた八丁村（現、八帖町）で作られたことからこの名がついたと言われています。蒸した大豆と塩のみから作られ、天然醸造で2夏2冬以上かけて熟成させた本格的な高級味噌で、家康公も戦の兵糧とされたと伝えられています。

現在も八帖町には「まるや」と「カクキュー」さんの2軒の長い歴史を持つ蔵元があり、その味噌蔵には、重石がピラミッド型に積まれた大きな木樽が、ずらりと並んでいます。味噌蔵が並ぶ通りを歩くと、歴史を感じる佇まいにタイムスリップをしたかのようです。

ドラマの舞台に、街中に熱気

平成17年の7月、突然NHKから、この八丁味噌の蔵元を連続テレビ小説「純情きらり」の舞台にしたいとの話をいただきました。全国に岡崎市



蔵の中の味噌桶。桶の高さは2メートル近くある

の名を売る千載一遇のチャンスです。市を挙げてのサポートと、ロケを契機としたまちおこしが決まり、プロジェクトチームが組織されました。

また、市民の皆さんの間にもロケに対する期待と熱気があふれて、街も活気づき、市へ「エキストラでの参加はできないか」「何か手伝いたいだけだ」などの問い合わせが相次ぎました。

市は、市民の皆さんの熱意に後押しされ、NHKと交渉して、エキストラとロケのお手伝いをする市民サポーターを公募することにしました。

その結果、NHKからオーダーのあった120名のエキストラに対し、応募は1028名、市民サポーターには550名の皆さんが登録されるという大盛況。これらの方には、市民サポーターズクラブを作り、加入していただきました。



イベントボランティア「岡崎きらり隊」による手形の清掃



市民サポーターによる「純情きらり」ロケ準備。
アスファルト道路に砂を撒き、掃き整えた

また初回のロケ地になる味噌蔵周辺では、地域の皆さんと関係者でロケ直前に清掃をするなど、ロケ隊のお迎え準備も万全に整えてくれました。

平成17年11月、克蘭クイン。第1話で放映される八丁蔵通りの周辺を、昭和初期のイメージにするため、アスファルト道路に砂を撒き、掃き整えたり、交通整理をしたり、エキストラの受け付けをしたりと、市民サポーターさんたちが大活躍されるなか、無事ロケは始まりました。

俳優の手形を置き、回遊ルート設定

プロジェクトチームも、ロケの対応に日夜明け暮れていましたが、このままロケが終わると、一体何が残るのだろうという思いがメンバーの心の中によぎりました。そこで考えたのが、手形です。出演された俳優さんに手形を残していただき、放映後の観光資源にしようと企画しました。

早速、NHKのプロデューサーに相談したところ、俳優さんや事務所との交渉役をしていただき、主だった10人の俳優さんも快く、無償で引き受けていただきました。

手形の設置場所は、一番ロケが多かった味噌蔵のある八帖地区と、次にロケが多かった岡崎公園にしました。岡崎公園は城址公園で、岡崎城や三河武士のやかた家康館、そしてお堀などが残り、八帖地区同様に歴史的な景観地区です。相乗効果をねらい両地区へ観光客が回遊したくなるよう手形をそれぞれ5基ずつ置き、回遊ルートを設定し、「純情きらり手形の道」と名付けました。

観光客が大幅に増加

このほか、幹線道路や味噌蔵周辺での道路案内板の設置、味噌蔵周辺道路の脱色舗装、観光客へのおもてなし講座など37事業を進めました。

平成18年の観光の実績ですが、対前年

比、入場者では、岡崎城が29・90%増、三河武士のやかた家康館が66・12%増。市内の宿泊者数は34・71%増という良好な結果でした。

増加のピークは平成18年でしたが、19年以降もはずみがつき17年を下回ることはありません。八丁味噌の2軒の蔵元も、平成18年には例年の2倍以上の観光客が訪れたそうです。

また思わぬ成果もありました。放映終了後、市民サポーターズクラブの有志により、イベントボランティア岡崎きらり隊が結成されたのです。現在、市の行うイベントのサポーター、手形の道の清掃、経験を活かした映画やテレビのロケのサポーターなどに活躍されています。

今後フィルムコミッションに取り組もうとする本市にとって、大切な存在となっています。

味噌蔵の行く末は

味噌蔵のある八帖地区は、ドラマの舞台になったことを契機に都市計画法に基づく「地区計画」が定められ、また「景観形成重点地区」に指定されました。今後、無電柱化などの整備が進められる予定で、地域の皆さんのご理解ご協力により、ますます趣きのある景観となっていくことでしょう。

八丁味噌の味噌蔵は、現役の蔵です。大量の大豆がおいしい味噌になるため、今も熟成されています。味噌蔵の景観環境を守っていくことで、地域の皆さんの誇りや郷土愛も熟成されていくことを願ってやみません。

広域連携で酒蔵めぐりツアーを推進 —日本酒のふるさと・播磨地域—

姫路市市長公室 企画政策推進室

播磨広域連携協議会

兵庫県南西部の播磨地域は、「播磨国」として古来より歴史や文化が豊かであり、また温暖な気候に恵まれ、豊穡の地として知られてきました。

この播磨地域の市町が連携・団結し、防災や観光など広域的な取り組みを推進することを通じて、「播磨」の存在を全国に発信すること及び播磨地域の総合力を高めることを目的として、平成24年5月に「播磨広域連携協議会」が発足しました。現在では、姫路市・加古川市・たつの市・小野市をはじめ、構成市町は12市9町となり、播磨全体での広域連携を推進できる体制となりました。

はりま酒文化ツーリズム

播磨広域連携協議会の大きな柱の一つである観光施策の連携を考えた時に、共通の地域資源とし

て浮上してきたキーワードが「日本酒」でした。

今から1300年前に編纂された播磨国風土記には「大神の御粮（みかれい）沾（ぬ）れてカビ生えき 即ち酒を醸（かも）さしめて 庭酒（にわき）を献（たてまつ）りて宴（うたげ）しき」（神に捧げた米が濡れてカビ（麴）が生えたので、それで酒を醸して、それを神に献上して酒宴をした）という記載があり、これは現在の日本酒の製造方法である麴を使って酒造った文献としては日本最古のものであると言われています。

また、お酒を造る酒米の代名詞にもなっている「山田錦」は播磨の地で誕生し、兵庫県が全国の生産量の8割を占めています。その大部分が北播磨地域で生産されています。

そんな山田錦のふるさとを背景に、播磨地域には30余りの個性的なオンリーワンの酒蔵が一円に点在しています。

このように、播磨の地は、とても日本酒にゆかりがあり、「播磨は日本酒のふるさと」を地域ブランド化しようと考えました。これは一つの市町

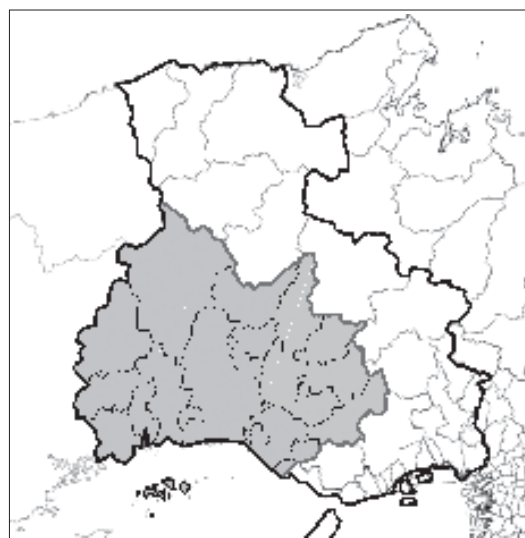
だけでは見えてこない広域連携ならではのキーワードだったのです。

このような経緯から播磨広域連携協議会と播磨地域にある4酒造組合（はりま酒文化ツーリズム協議会）が連携して、「はりま酒文化ツーリズム」に取り組んでいます。

酒蔵めぐりツアーがスタート

はりま酒文化ツーリズムとしてまず注目したのがやはり酒蔵です。その所在は必ずしも交通の便の良い所ばかりではありませんが、普段はなかなか行けない酒蔵をめぐる旅を企画してはどうかという案が出るまでにそう時間はかかりませんでした。通常、見学ができない蔵もありますが、酒蔵めぐりツアーについては酒造組合としても全面的に協力体制をとっていただきました。

また、播磨広域連携協議会・はりま酒文化ツ



播磨広域連携協議会構成市町

[illegible]

酒蔵めぐりバスツアーのチラシ

さらに地元自治体
によるちよつとした
ご当地サービスもこ
のツアーの売りに
なっており、参加者

いたり、景観整備されているところも多くあります。そんな中にたえずむ酒蔵は町のランドマーク的存在であり、白壁やレンガの煙突を見ながら、周辺を歩いていっただけで心地よく、落ち着きます。

さらに地元自治体

ズム推進事業」が、全国613件の応募の中から、78件の一つとして採択されましたので、京阪神や首都圏から、そして将来的には海外からもお越しいただけるように、宿泊を伴う滞在型ツアーづくりに取り組むなど、広域連携ならではの市町の垣根を越えた、より魅力あるツーリズムを目指していきたいと考えています。

今後もしも引き続き、酒蔵探訪を通して多くの方が日本酒ファンになっていただけるように「播磨は日本酒のふるさと」の魅力を発信していきたいと思っています。

リズム協議会の提案に対し、地元のバス旅行会社が、より魅力ある企画に充実させて、商品化していただいたことは有難いことでした。このように多くの関係者の協力や官民一体となった取り組みにより、「播磨酒蔵めぐりツアー」が平成24年9月にスタートしました。これまで5回実施し、164名の参加があり、大変好評です。

初めて酒蔵を訪れた人にとって、歴史ある蔵の美しさは新鮮な驚きだと思います。そして中に入ってみると、お酒のなんとも甘い心地よい香りが重厚な建物全体に漂っています。これだけでも十分楽しめますが、やはり最大のお目当てはお酒の試飲でしょう。目の前で造られたばかりの新鮮なお酒をいただく時の参加者のにこやかな顔と

いったらありません。

を楽しませています。このサービスを目当てに来られる参加者もいらつしやるほどで、お客様を広くお迎えしようというホスピタリティあふれる地元自治体の趣向です。

今後の展望

バスツアーは、毎回違った酒蔵を訪れるため、リピーターも現れ、最近は若い人達もグループで申し込んでくれるようになり、京阪神からの参加もあります。今後は、月1回のバスツアーを継続して実施していくとともに、まだ訪れていない素敵な酒蔵や、その周辺の歴史・文化の探訪を含め、さらに掘り下げていきたいと考えています。

さらには、観光庁の「官民協働した魅力ある観光地の再建・強化事業」に「はりま酒文化ツーリ



酒蔵での説明の様子

白壁土蔵の街、賑わい復活をめざして —古い街並みを、いかに今と未来へ活かすか—



株式会社「赤瓦」代表取締役 ● 田村幹夫

立ち上げれ田舎町

倉吉の中央にドンと立ち、天女伝説も残る打吹山。その麓にある市役所の屋上から市街地を眺めてみよう。そこには、見渡すかぎりの赤い石州瓦の家並み。そして、玉川という用水路畔には、江戸時代より連綿と連なる商家裏の白壁土蔵群。

昭和30年代から40年代前半まではあんなに商店が連なり、行き交う人々や多くの子供たちの姿が見られるなど賑わいを見せていた倉吉中心市街地が、たった四半世紀の間にこんなにも衰えてしまいました。

今から17年前。普通には戻らないにしても、これを何とかしなければならぬと立ち上がったのは、商工会議所青年部でした。

まちおこし会社・赤瓦設立

歴史的まち並みを活かした賑わいの再生を目指す

して、まず勉強させていただいたのは太閤さんゆかりの滋賀県長浜のまちづくり会社「黒壁」です。見学に行き設立者の話を伺い、それを倉吉のまちおこしにどう活かせばいいのか議論しました。

商工会議所はもとより、市役所・商店街組合・金融機関等々、どういう手法が可能なのか。どれくらいの資金が必要で、いくら出資をお願いできるのか。更には古い建物を活かした新たなまちおこし施設を作るのに、旧家である家主さんの理解が得られるのか。

それらの難題をひとつひとつ乗り越えて、平成9年、まちおこし会社「赤瓦」の設立に至りました。ただ、当時「NPO」という手法があったならそうになっていたのかも知れませんが、当時まだなかったので株式会社として出発しました。

市民からの出資が約6千万円。市や商工会議所、金融機関等からの出資が

約3千万円。総資本金は9千万円です。今の時代ならとても無理な話で、まだバブルの名残があったからこそ可能だったのかも知れませんが。

困難な会社経営

平成10年5月、会社設立から半年後に白壁土蔵群の歴史的建造物を利用した赤瓦1〜3号館がオープンしました。しかし、その後に更なる難題が待ち受けていました。

当初、株式会社赤瓦としては、古い建物を改修して使用できるようにし、その後は施設を利用するテナントを募り、地域デベロッパーとして会社経営を続けようという目論みでした。しかし、15年が経過し、街を訪れる人が増えた今でも、すべての施設をテナントで埋めることができません。現在、地元物産の直売部門の運営によって何とか経営を支えているのが実情です。



江戸時代末期から伝わる倉吉緋を着た女性たち



春の恒例行事の「ひな流し」。毎年4月に行われる



初秋の催し「里見時代行列」の様子

したがって、十数名の取締役は無報酬のボランティア。更には日本社会全体のデフレ不況によって、いつまで会社の運営資金が続くのか困難な状況にも陥っています。

ただ、そこで立ち止まってははいられませんので、伝統的郷土玩具である「はこた人形」作りや、「倉吉緋」のまち歩き体験など、新たな来街者増加策にも取り組んでいます。

賑わいの復活目指して

でも、すべてが悲観的なことばかりではありません。

最初、1〜3号館で出発した赤瓦ですが、今では16号館までの陣容が整いました。

さらに、赤瓦何号館とは名乗っていないまでも、倉吉の白壁土蔵周辺に集まる人々をターゲットにした若い人たちのお店が幾つも誕生してきました。

赤瓦がオープンする以前から営業を続けている商店も、その扱い商品に観光客向けの物を加えたりもしています。

もし16年前、赤瓦という会社ができていなかったら。もし、伝統的建造物群保存地区に指定されていなかったら、この地域はもっと衰退していたかもしれません。しかし今では、年間50万人以上の人が来ていただけるようになりました。

でも、そこで更に目指すのは、観光客でも商売でもなく、そこに

暮らす人々を少しでも増やす活動であると思います。

かつてのような賑わい。商店がずらっと並び、子供たちの走りまわる声が響いていた町の復活を目指して。これからのまちおこしは、定住者の確保と空き家対策というキーワードが最も重要なかも知れません。

新たなスタートラインに

室町時代より、山陰の中でも最も古い町に属する倉吉。今もなお現存する白壁土蔵群。

それは伝統的建物群として文化的にも重要視されていますが、それが未来に続くものでなければ何の意味もありません。倉吉では赤瓦の設立以来、それに続く様々な動きも出てきました。

地元商店主を中心とした「あきない中心倉」による福の神のまち巡り。倉吉の江戸時代三大話をテーマとした講談寄席。市内最古の商家「倉吉淀屋」を残し、活用しようとする市民運動。

さらには、いくつかのNPO法人によるウォーク大会や地域のなりわい作り。あるいは周辺の景観を活かした地域おこし等々。

しかし、経済的視点だけで見れば、倉吉のみならず日本中すべての田舎町が消滅の危機に立たされているのが現状だと思っています。

ただ、各地でますます盛んになるまちおこしや村おこしの動きを見ながらずっと先を展望すれば、倉吉も他のすべての田舎町も今、素晴らしいスタートラインに立っているとも言えるのではないのでしょうか。

酒都・西条の酒蔵通りを観光資源に ―官民一体で魅力あるまちづくりを推進―



東広島市都市部次長兼都市計画課長

● 来得康徳

はじめに

東広島市は、広島県のほぼ中央部に位置し、旧西条町への広島大学の統合移転を契機に学園都市として昭和49年に西条町、八本松町、高屋町、志和町が合併して誕生した市であり、平成17年にも周辺の黒瀬町、福富町、豊栄町、河内町、安芸津町と合併し、現在に至っている。二度の合併を経て、西条町を中心とした都市化に伴い人口の流入が急速に進み、人口は19万135人（平成22年国勢調査）、面積は635・32平方キロメートルとなっている。

酒蔵通りで魅力あるまちづくり

西条は、灘、伏見とともに並び称される銘醸地として知られ、JR西条駅南側を通る旧西国街道沿いの約1キロ周辺に8社の蔵元が集積する全国的にも珍しい地区であり、酒蔵が建ち並ぶ美しい景観を今に残している。各蔵元の赤煉瓦の煙突は、

「酒都西条」のシンボルとなっている。

このように酒蔵通りは、酒蔵や煙突、古い商家等が建ち並び他都市にはない独特の景観・魅力を有しているながら、観光資源として十分に認識されていなかった。そのような状況の中、市による中心市街地活性化計画策定に向けた動きと合わせ、市の重要な観光資源である酒蔵通りの持つ歴史、文化的な環境を活かした魅力あるまちづくりに取り組むこととなった。

市ではハード面の整備として、「酒蔵地区まちづくり協議会」で取りまとめた提案を基に、散策道の美装化や街路灯の設置、ポケットパークの整備等、快適に観光を楽しんでいただける環境づくりを進めている。また、ソフト面では、地元団体、市民有志、酒造会社等が創意工夫を重ねながら、イベントやまち歩きガイド、酒蔵の公開等を実施し、酒蔵通りの魅力を高める取り組みが徐々に地域に浸透してきている。

特に、平成2年から始まった「酒まつり」は、観光協会、市民ボランティア、酒造会社及び市等



毎年10月に行われる「酒まつり」。2日間で約25万人が訪れる

官民一体となって支えられ、近年では25万人もが訪れる一大イベントに成長している。

活動の紹介（取り組みの一例）

○酒蔵地区まちづくり協議会

地域の意見を取り入れながら酒蔵地区の事業計画を策定していく中心団体として、平成14年に行政からの呼びかけに呼応するかたちで、酒造会社、地元住民、行政から構成される「酒蔵地区まちづくり協議会」が設立された。

協議会は、事業検討を行う部会（公共施設整備部会、地域活性化部会、商業活性化部会）の3つ



美しく整備された散策路



酒蔵マンホール。全国からデザインを公募し、優秀作を採用している

のワーキンググループと意思決定を行う役員会から構成されており、各ワーキンググループでハード及びソフト両面から様々な事業検討を行い、30のハード及びソフト事業のメニューを盛り込んだ提案書を取りまとめた。

事業メニューのうちハード事業については、市によって整備が進められ、平成17年度から21年度にかけて国交省のまちづくり交付金を用いて、散策道の美装化（石畳、インターロッキング等）や街路灯の設置、トイレを付帯する休憩所として酒蔵ポケットパークの設置を行った。また、ソフト事業については、地元団体や酒造会社を主体に展開されている。

このような酒蔵地区のまちづくりに関する取り組みが評価され、平成23年度に「酒蔵のあるまち並み」が国土交通大臣表彰である「手づくり郷土（ふるさと）賞（大賞部門）」を受賞した。

○ようこそ 醸華町西条

酒造会社では、酒蔵通りを観光資源とする気運の高まりを受け、酒蔵の開放、見学や試飲といった観光面でのおもてなしをしている。平成17年から始まった酒蔵の開放の取り組み「ようこそ 醸華町西条」では、開放している酒蔵には目印として統一した看板を置き、試飲や酒蔵等を利用した喫茶、ジャズコンサートなどイベントを開催して、来訪者にまち並みや日本酒文化に触れてもらう活動を行っており、酒蔵ごとにそれぞれ工夫を凝らした取り組みとなっている。

また、平成15年から、酒蔵ごとにそれぞれ名前が付けられた「仕込み水井戸」を設置し、平成18年には8社全てが完了し、酒ばかりではなく、名水の飲み比べを楽しむ仕掛けづくりをしている。

○酒蔵のまちでくつガイド

平成10年から地元ボランティア団体が酒蔵通りのガイドを始められ、随時行うガイドの他、毎月

定期的に「酒蔵のまちでくつガイド」を実施し、まち歩きを楽しむ工夫に取り組んでいる。また、子どもガイドの養成講座や地元大学生ガイドの育成等に尽力し、「自分の住むまちを知り、魅力を発見、郷土を愛する心を醸成する」取り組みも行っている。

○くぐり門の改修

昭和初期の芝居小屋の入口門（左右の棟が屋根でつながる）があり、老朽化し取り壊す寸前だった時に、酒蔵通りの活性化のために残す必要があるとの判断で、市観光協会が所有者から建物の寄贈を受けて平成23年度に改修した。無料休憩室（観光情報の受発信機能）、多目的スペース、喫茶、公共トイレを備え、来訪者の観光交流の拠点として活用されている。

○酒蔵マンホール

平成22年に市内の学生・生徒をはじめ、全国の一般の方を対象に酒蔵通りのマンホールデザインを募集した。全国から660件の応募があり、市・酒造組合・酒蔵地区まちづくり協議会によって選定を行い、最優秀作のデザインを採用し酒蔵マンホールとして整備を行っている。

◆◆◆ 今後の展望

都市化とともに古くからある町屋の多くが取り壊され、現在、旧西国街道沿いの古いまち並みは失われつつある。酒蔵通りは本市の重要な観光資源であると同時に、中心市街地に位置することから、中心市街地の活性化を図る上でも核となる地区である。

酒蔵群や煙突が見える「酒蔵のあるまち並み」は、西条固有の景観であり、官民一体となった景観保存に向けた取り組みが求められる。今後、地域住民や酒造会社等に対して、景観形成及び活用の方針について、より一層の意識共有を図っていく必要がある。

酒蔵を「コミュニティ」再生の拠点に活用 ―「地域の元気」を発信、どぶろく造りも―



岩松町並み保存会 事務局 ● 森田浩二

てんやわんやの町

愛媛県宇和島市津島町の岩松地区は、江戸末期から明治、大正、昭和初期にかけて、宇和海沿岸の海山物資の集積地として、またそれに伴う人が集まる町場として栄えた。

昭和20年12月から昭和22年10月まで岩松に戦後疎開した当時の流行作家・獅子文六は、代表作「てんやわんや」で、この地を「相生町」として紹介している。当時のユーモアと人情に溢れた岩松の住民を面白おかしく、時には皮肉交じりに描き、お祭り騒ぎの好きな人柄、土地柄を実に鋭く描写している。また、「てんやわんや」は、昭和25年、映画製作会社・松竹がオール現地ロケを敢行、この界限の町並みが映像として残された。それ以来、岩松は住民自らが「てんやわんやの町」として紹介するようになった。

老朽化した酒蔵を地域のシンボルに

豊富な水に恵まれ、米の集散地であった岩松は、17世紀後半に豪商・小西家が宇和島城下より御用商人として移り住んで以来、醸造業が隆盛する。最盛期には酒造場3軒、醤油屋4軒が軒を連ねる醸造の町でもあった。今では、酒造場は3軒とも廃業し、醤油屋が2軒残るのみとなった。昭和50年代まで賑わった「商店街」も、今はひっそりと佇んでいる。

その通りのほぼ中央に、往時の繁栄を伝える「西村酒造場」の建造物群がある。通りに面する店舗部分は江戸末期、酒造りが行われた蔵自体は明治時代の建造物である。西村酒造場は、昭和46年まで「金丸」という銘柄を中心に酒造りを行っていた。その後は業を閉じ、酒蔵は酒造り道具を含めその場所に眠ったままである。麹室、仕込み蔵、貯蔵庫といった酒造場が昔のままに残っている。この旧・酒蔵を拠点に岩松の良さを見直し、人々

の交流の場として、地域コミュニティ再生の拠点と位置付けて活動するのが「岩松町並み保存会」である。老朽化した酒蔵を、岩松地区のシンボルとして保全するのも大きな目的である。

コンサート開催が転機

平成2年に、あるまちおこし団体が所有者と掛け合い、「クラシックコンサート」の会場として使ったことが転機となる。この酒蔵の存在が注目され、岩松に「こんな場所があるんだ!」という驚きとともにファンが増えてゆく。一時期、使用が途絶えていたが、平成13年に再び所有者からさまざまな活動に使用することへの理解をいただき、平成17年には酒蔵部分が宇和島市（旧津島町）へ寄贈された。それを機に「岩松町並み保存会」が結成され、酒蔵を中心とした岩松の町並み全体を守っていくという活動が始まった。

以後、我々はこの酒蔵を拠点に、岩松のまち全体で自分たちの手づくりイベントを実施し、その存在をPRしている。これまでに、この酒蔵と路地裏を使った蚤の市イベント「横つちよストーリー」やコンサート、まちづくり学習会、講演会、絵画や写真のギャラリ、落語会、カフェ、竹灯籠でライトアップする「行燈回廊」、通りの住民に呼びかけてお雛様を飾ってもらう「ひな回廊」など思いつくままに開催してきた。その真ん中にはいつも酒蔵がある。

構造改革特区利用し、どぶろく造り



どぶろく「なっそ」。後ろに見えるのは旧蔵元



どぶろく「なっそ」の新酒蔵出しイベントの新酒祭り



新酒祭りの様子

酒蔵の保存・活用をきっかけに町並み保存を意識し、どぶろく造りに発展したが、まだまだ課題は多い。酒蔵本体も一部は屋根の葺き替えをしたが、大部分が雨漏りをし、山側の土壁も部分的に落ちている。現在は酒蔵だけの活用ではあるが、通りに面した玄関から店部分、生活空間などすべてを保存・公開できるようになれば岩松にとって本当の宝物になるだろう。そうなれば地域の誇りとコミュニティの中心に酒蔵があるはずだ。今は、力のため、元気を発信し続け、その時を待ちたい。

ある日、酒蔵の活用方法を考えていた折り、メンバーから「酒蔵は本来酒を造るところやろ。ここでまた酒造りはできんるか？」という声が上がった。

しかし、廃業した酒蔵があるからといってすぐに酒造りができるわけがない。日本酒造りの免許（許可）なんてムリムリ！と思案しているところへ浮かんだのが「どぶろく」。これなら作れるかも……。構造改革特区という制度のもとで、鍋一杯から醸造できるらしいと聞きつけ、そのための準備が始まった。

が、市に寄贈された建物を団体が使用するのはいろいろと面倒なことにもなりかねないので、隣接する醤油店の蔵を借りてどぶろくの醸造場とした。「岩松町並み保存会」という任意団体では酒造免許がもらえないので、メンバー有志が一人10万円ずつ出資して8名（現在は10名）で「企業組

合いわまつ」も立ち上げた。

幸い、当時愛媛県が制定した「えひめ夢提案」という制度を活用することで、県の全面的な協力をいただき、税務署、保健所へのアプローチもスムーズに進んだ。県の補助金をコンペでゲットし、醸造場の整備もできた。平成19年10月、晴れて「どぶろく製造免許」を取得する。それから6年、自分たちで米づくりから醸造、ビン詰め、販売まで手掛けている。どぶろくの名前は「なっそ」。（「なっそ」とはこの地方の方言で「なんでよ?」「どうして?」という意味）ちなみに、nassoはossan（我々おっさん）たちが造っている酒だ。

最大のイベント、新酒祭り

毎年12月の第1日曜日には、その年のどぶろく初蔵出しを記念して新酒祭りを開催している。

我々が主催する最大の手づくりイベントだ。商店街を車両通行止めにして宴会場に見立て、通りの入り口に大きな暖簾を掛け、「なっそ！ 昼から忘年会」と題して我々が造った新どぶろくを振る舞い、地域の皆さんに屋台もお願ひして、子どもたちや地元住民が楽しめる機会を提供している。

このように、現在はどうぶろく「なっそ」を道具にいろんなイベントも手掛けているが、あくまでも目的は、岩松地域の住民が声を掛け合ったり、会話の弾む機会・場所を創出し続けることであり、観光客に来てもらったり、儲けを求めるものではない。目的と手段をとり違えないように、大袈裟に言うとうつくりではあるが地域住民が元気に活発に暮らしていける岩松を作り上げたい。

酒蔵がコミュニティの中心に

酒蔵ツーリズム®で街を活性化 ―「チャンピオン・サケ」受賞が大きな契機に―

佐賀県鹿島市商工観光課観光振興係長 ● 山口 洋

隠れた酒どころ

皆さんは、「チャンピオン・サケ」という言葉をご存知ですか。

これは、IWC（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）というワイン業界で世界的に最も權威のある品評会の日本酒部門最優秀のお酒に与えられる賞のことです。日本酒部門は、2007年に創設され、2011年、出品数206蔵元・468銘柄の日本酒の中から鹿島市内の酒蔵である富久千代酒造の「鍋島大吟醸」が受賞しました。

鹿島市は佐賀県の南西部に位置し、有明海と多良岳山系に囲まれた人口約3万人の小さなまちです。多良岳山系の豊富で美味しい地下水に加え、米どころであるため、昔から酒造りが盛んで、佐賀県酒造史によると市内にはかつて最大25の酒蔵がありました。現在でも醸造を続けている酒蔵が国の重要伝統的建造物群保存地区である肥前浜宿を中心に市内各所に6軒残っており、世界的・全

国的な品評会で様々な賞を受賞するなど隠れた酒どころです。

酒蔵ツーリズム推進協議会を設立

このチャンピオン・サケ受賞を契機に、市内の酒・酒蔵と合わせ、その酒が生まれた土地の歴史や文化と一緒に伝えていく取り組みを始めていくと、蔵元を中心に2011年秋、「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」を設立しました。この協議会メンバーには、蔵元をはじめ、商工会議所、観光協会、市も参画し、オブザーバーとして県の流通課・観光課なども協力をいただいています。

協議会の設立については、酒サムライコーデイナーである平出淑恵さんが同年、鹿島を訪問されたことも大きく影響しました。平出さんは蔵元や市の担当者などに対し、世界的にはブドウとワインの産地を巡るワインツーリズムが盛んであり、日本でも同様に酒・酒蔵を活用した取り組みによる地域活性化ができる可能性があることを強

調されました。これが一つのきっかけになり、蔵元ほか関係者の中で協議会設立の機運が高まりました。

また最大の要因は、今回の「チャンピオン・サケ」受賞を一つの蔵の榮譽ではなく、鹿島市の酒文化の結晶であると受け止め、受賞祝賀会を開催するなど、市内すべての蔵元さんが結束していたことです。

3万人が参加、大きな自信に

協議会の取り組みとしては、鹿島の酒蔵を巡り地域の文化を楽しむというイベントとして、第1回「鹿島酒蔵ツーリズム」を平成24年3月24、25の2日間開催しました。

その内容は、これまで蔵を開放していなかった蔵を含め6蔵の蔵開きと、それぞれ別の日に行つ



「チャンピオン・サケ」受賞祝賀会（2011年秋）。酒蔵ツーリズム推進協議会が設立されたことが報告された



循環バスを待つ人々



観光ボランティアガイドの育成講座の様子

てきた様々なイベント（花と酒まつり、発酵まつりなど）の同時開催です。

当日は、各蔵やイベント会場を巡る無料の循環バスを運行し、参加者は酒蔵や周辺の観光情報などを記載した酒蔵マップやパンフレットを片手にそれぞれの特徴などを調べ、バス車内では好みの酒談議に花を咲かせ、本当に楽しそうでした。

このツーリズムには、遠くは東京・大阪などから、また初めて鹿島へ来られたお客さまも多く、約3万人の方に鹿島へお越しいただきました。無料の循環バスは乗り切れないほどの混雑を見せ、また近隣の市町の旅館も大盛況でした。

アンケート結果によると、参加者の約9割の方が何らかの買い物をしており、これまで開催したイベントと比較にならない経済効果があったほか、鹿島を広く全国にPRすることにもつながりました。

こうした経済効果やPR効果などから、酒蔵ツーリズム関係者や市民は、「なにもないと言われたきたこの街にも、これ程のお客さんに来ていただき、楽しんでいただく貴重な素材、資源がある」ことを認識し、「自分たちにもやれる」という大きな自信を持つことができました。

◆◆◆ 受け入れ体制を充実

第1回のイベントを終え、課題も見えてきました。こんな小さな町に2日間で多くの観光客が来ていただいたことは大変有難いことですが、初めて開催したこともあり、スタッフ・関係者すべて喜びと同時に不安も感じました。それは、受け入れ体制の充実です。

無料の循環バスを1日3台運行しましたが、満車で乗り切れないことがあったほか、スタッフ不足や情報共有不足で参加者に十分対応ができませんでした。このため今年3月に開催した2回目の酒蔵ツーリズムでは、バスの便数増やコースの見直しを図るとともに、観光ボランティアの協力を求めるなど受け入れ体制を充実させました。

ただ、最大の課題は、一時的なイベントだけ

でなく、年間を通じた取り組みと今後の協議会の運営方法です。

イベントは、PR効果はあっても一過性のものであるため年間を通じて鹿島へ来ていただく取り組みが必要です。その第一歩として、先程お話ししたおもてなしの一つとして、酒・酒蔵だけでなく周辺の観光情報を含めて紹介できる観光ボランティアガイドの育成も進めています。また、地酒だけでなく、その土地で楽しめる地酒に合う食も発信していけないか、協議会の中に部会を設け検討を進めています。

このほか、現在協議会の運営については行政からの補助金も一部入っていますが、将来的には補助金に頼らない独自運営ができるよう事業費の確保に向け協議会の中で検討しているところです。

◆◆◆ 新しい旅のスタイルを

いま、国では「國酒プロジェクト」の一環で全国的に酒蔵ツーリズムを推進しているという動きがあり、当地の取り組みも全国の流れに埋もれず、一つ一つ課題を解決し、鹿島らしさを追求しながらその魅力を発信していければと思っています。最後に鹿島酒蔵ツーリズムのコンセプトをご紹介します。

「鹿島の酒蔵を巡り、蔵人と触れ合い、彼の造る酒を味わう。その酒が産まれた土地を散策しながら食や文化、歴史を全身で楽しむ」

鹿島酒蔵ツーリズムとは、そんな旅のスタイルです。ぜひチャンピオン・サケが生まれた鹿島へお越しください。

蔵によるまちづくり

—秋田県横手市増田町「内蔵(うちぐら)のある町」を例に—



株式会社 日本政策投資銀行地域企画部 ● 佐藤 翼

近年「蔵」を活用したまちづくりが注目を集めている。本稿では現在進行形で行われている秋田県横手市増田町のまちづくりを紹介するとともに、酒蔵ツーリズムの課題等を探ることとした。

知的好奇心の刺激

かつての増田は、みちのくの経済活動の要衝として栄え、財を成した時代に競うように建てた豪華な内蔵が繁栄の歴史を今に伝える町として知られる。だが、メ

インストリートの中七日町通りを歩いても、豪華な蔵らしき建物は確認できない。考えてみると横手盆地の南端にある小さな町が何故そこま



中七日町通り

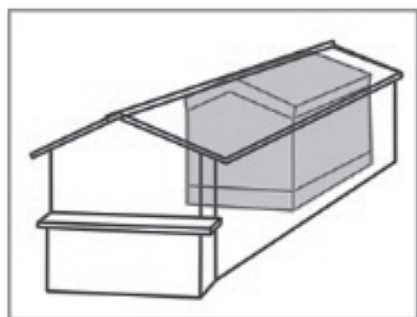
で繁栄することができたのか不思議に思う。ここに、歴史背景と共に、内蔵の所在や繁栄の理由を知りたいと思わせる知的好奇心の刺激効果がある。

①内蔵とは

内蔵は、その名の通り建物の中にある蔵(土蔵)の事。母屋の後方に建ち、内蔵と母屋は土間によって繋がりが建建物(さやたてもの)で覆われている。建建物は豪雪地帯が故、主に内蔵を風雪より守る役割があるが、外からは母屋と内蔵が同一の建物であるように認識させる。その

ため、近所に住む人ですら内蔵の有無についても分からない奥ゆかしい存在であった。

内蔵は、床の全てが板張りで



内蔵のイメージ

主に物品の収納を目的とした「文庫蔵(ぶんこぐら)」と、内部に座敷間を設け生活空間の一部とした「座敷蔵(ざしきぐら)」に大別され、町の中心部に現在でも40以上の内蔵が集中して現存。繁栄の歴史を現在に伝えている。

②繁栄の歴史背景

横手市増田町は、南北朝時代に増田城が築城されてから江戸時代に城が破却されるまでに、水路や道路がほぼ現在と同様形態に整備された城下町の町割りが基盤。小安街道と手倉街道という2つの脇街道が交差しており、小安街道は宮城県(栗原市等)へ、手倉街道は岩手県(奥州市等)へと至り、旧仙台藩など太平洋側の他藩と秋田藩内主街道の羽州街道とを結ぶ要衝であった。さらに、雄物川の支流である成瀬川と皆瀬川の合流地点に位置し水運の要衝でもあった。

江戸時代に多くの耕作地が開かれると、生産に適した気候と地理的条件をもち、且つ換金性が比較的高かったこともあり、養蚕業と葉煙草栽培が重要な産業となっていた。

明治になり、生産能力が向上した生糸や葉煙草の仲介をはじめとして、増田の商人たちは商業基盤を拡大。江戸時代より藩公認の市として発展を遂げた朝市や常設店舗では様々な商品が扱われ、増田はヒト・モノ・カネの流通拠点となっていた。商業活動の活性化は、町と個々の商店の繁栄をもたらし、商人たちは財力を競うように内蔵を建て、町屋を改築していった。当時の繁栄ぶりは、9人の出資による増田銀行(現・北都銀行)の設立や地元資本による増田水力電気会社の創立など会社設立にまで及んだ。

蔵の保存と地域振興

内蔵は貴重な歴史文化遺産であるが故、増田のように集積して現存していることは奇跡的と言っても過言ではないが、後世に向けて保存し続けるには何らかの対策が必要不可欠となる。その手段の一つとして横手市は、内蔵だけではない歴史的資産を後世に継承すべく、平成25年度中に国の重要伝統的建造物群保存地区選定を目指して準備を進めている。

この制度は、城下町・宿場町・門前町等の全国各地に残る歴史的な集落や町並みの保存を図ることが目的。市町村が伝統的建造物群保存地区を決定し、保存条例に基づき保存計画を定める。国は市町村からの申し出を受けて、価値が高いと判断したものを重要伝統的建造物群保存地区に選定。市町村が行う修理・修景事業、防災設備の設置事業、案内板の設置事業等に対して補助するとともに、税制上の優遇措置を設ける等の支援を行っている。

増田の特徴である城下町を基礎とする町割りと、現存する内蔵に代表される繁栄を極めた商家町の面影は、単体の建物等ではなく建造物群を面として保存しようとする本制度に合致する。また、この制度の活用によって、歴史的景観の保存だけでなく、地域の環境や防災設備の整備など、住民にとって暮らしやすく、訪れる人にとっても魅力あるまちづくりを展開しやすくなる。

このため横手市は「文化的財産を後世に継承すべく、通年型観光の拠点地区と位置付け、住民意

識に基づく『まちづくり』を進めるためにも重要伝統的建造物群保存地区の選定を目指す」としている。ただし、補助が受けられる等のメリットがある反面、建造物の増改築には事前に許可が必要となる等の制約も掛かるため、選定にあたっては住民と行政との協力が欠かせない。

観光資源の蔵

明治から昭和の初めまで一時代を築くも、増田商人の多くは地主を生業の母体としていた商人地主であったため、時代の変遷と共に繁栄は過去のものとなり、以降約半世紀も表だって増田の蔵が注目されることはなかった。増田の町並みや内蔵に代表される伝統的建造物が注目されるようになったのは比較的最近の出来事である。

平成11年に当時の増田町商工会が中七日町通りを「くら（蔵）しつくロード」と銘打ったことより始まる。当時、秋田県の県南東部地域が連携して地域おこしのテーマを考えていた時期であった。その折、他の地区には代表的な特産物や施設があるが、増田には何があるかと思かしていた商工会に対し、県外から転勤してきた銀行の支店長が「増田には蔵がある」と提言したことがきっかけになった。

また、平成15年より増田町文化財協会が内蔵の調査と写真撮影を開始し、平成17年に写真集「増田の蔵」を発刊した。内蔵の多くは住む人の生活の場でもあるため、なかなか理解が得られないのも当然だが、徐々に所有者自身が蔵の価値について再認識するようになり、平成18年に「蔵の会」

が発足。同年「蔵の日」を催し、内蔵の保存と歴史的・文化的価値を活かした「まちづくり」を目指して公開に踏み切った。（注1）

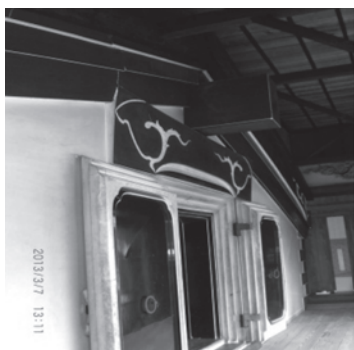
代表的な内蔵の紹介

●佐藤又六家

江戸時代から続く旧家。増田銀行設立発起人に9代と10代の当主2人が名を連ね、銀行創業当時の取締役でもあった。10代は桜の名所である真人公園開園時に桜の苗を寄贈し、現在の公園の礎を築いた。12代目の現当主はカメラ店を経営。現在の店舗や居間となっている正面の蔵は、明治元年に通りの類焼を防ぐための要請もあって着工し明治3年に完成した。店先から間口いっばいの蔵造りが特徴。蔵の公開をはじめた第一人者でもあり、現在の当主夫妻の説明により案内も受けられる。

●日の丸醸造株式会社

元禄2年（1689年）創業で現在の



佐藤又六家



日の丸醸造株式会社



旧石田理吉家



観光物産センター



増田で唯一の造り酒屋。大正時代には東北一の醸造高を誇った老舗。戦時中の企業整備により廃業したが、昭和23年に先代社長が300年の伝統を復活。代表銘柄は「まんさくの花」で、横手地方がNHKの連続ドラマの舞台となったこと由来。醸造元で購入もできる。明治41年建築の文庫蔵は事前に予約すれば見学が可能。

●旧石田理吉家

昭和初期まで酒造を営んだ旧家。先代当主は医院を開業し長く地域医療に貢献。現当主によって建物は横手市に寄贈された。木造3階建の主屋と

主屋東側に繋がる内蔵が一般公開されている。主屋は、昭和12年に上棟された戦前の建物。主屋奥に繋がる土蔵は、明治14年に上棟されたもの。

●観光物産センター

明治、大正期に金物商などを営んだ石田家より横手市に寄贈され、現在「観光物産センター蔵の駅」として伝統的建造物の公開をはじめとする増田町の観光案内所兼物産販売所として運営されている。間口が狭く、奥行きが極端に長い増田の町割りの姿が残っており、増田の町屋の特徴を知る格好の家屋。

酒蔵ツーリズム

「蔵」に係る政府の取り組みとして酒蔵ツーリズムがあり、本年3月26日には観光庁の主導で酒蔵ツーリズム推進協議会が発足した。

この背景には、昨年5月にオールジャパンで官・民が連携して、日本産酒類の認知度の向上と輸出促進に取り組むべく、「ENJOY JAPAN ESE KOKUSHU（國酒を楽しもう）」プロジェクトが立ち上がったことがある。その後、昨年7月に閣議決定された「日本再生戦略」に國酒をはじめとした日本産酒類の輸出促進のための総合的な環境整備が盛り込まれ、9月には「國酒等の輸出促進プログラム」が取りまとめられた。このプログラムの基本的な考え方は、①國酒等の輸出拡大②日本の伝統と文化を踏まえた国際的な國酒の認知度向上③地域活性化への貢献—となっており、酒蔵ツーリズムは「地域活性化」への貢献に該当する。具体的な施策として7項目挙げられた一つに、酒蔵ツーリズムの創造による地域活性化と明記された。

一連の活動は、政権交代を超え、本年1月に閣議決定された「日本経済再生に向けた緊急経済対策」に、日本産酒類の総合的な輸出環境整備として盛り込まれた。（注2）

◆ ◆ ◆ コンペティション受賞酒産地の可能性

『酒蔵ツーリズム』の先行事例として挙げられているものに、佐賀県鹿島市の「鹿島酒蔵ツーリ

ズム」(本誌事例12)がある。同市内の富久千代酒造有限会社の製造する銘柄「鍋島大吟醸」が2011年のIWC(インターナショナル・ワイン・チャレンジ)において、チャンピオンSAKEを受賞したことをきっかけに、「鹿島酒蔵ツーリズム推進協議会」を設立。同市内の酒蔵が連携して、昨年3月に第1回鹿島酒蔵ツーリズムを開催し、人口約3万人の町に2日間で3万人の来場者を呼び込むことに成功した。

期待されるのは2012年のチャンピオンSAKE受賞酒の産地でも酒蔵ツーリズムが拡大することだ。同年のチャンピオンSAKE受賞酒は秋田県湯沢市の木村酒造(ナショナル物産株式会社木村酒造事業部)の銘柄「大吟醸福小町」。現状では、同市において協議会の設立などには発展していないが、その可能性は十分ある。

秋田県湯沢市は、酒どころ秋田の中でも、古くから酒の町として知られており、現在でも5社の酒蔵が操業している。城下町としての景観を有し、四季折々の伝統行事や祭事も豊富だ。

また、市町村合併により日本三大うどんの産地である旧稲川町が湯沢市となったことにより、2011年から「全国まるごとうどんエキスポ」を開催している。2日間で約7万人の来場客が訪れるイベントであり、開催実績が2回である事もあって年々発展していく傾向にある。

1回目は9銘柄であったものが2回目には30団体が集い21種類のうどんを提供。また、湯沢の地名のとおり温泉施設も多くあるため、宿泊プランとのコラボレーションも実現されている。この時期に合わせて酒蔵見学等のイベントも同時開催さ

れるなど、様々な連携により地域総出で「湯沢」を満喫できるものとなっている。

湯沢市と増田は隣接しており、酒蔵も内蔵もある「日の丸醸造株式会社」がある。さらに湯沢の酒蔵を見学した後は増田の内蔵を見学してもらう等の連携により周遊の観点で好機となり得る。

◆◆◆ 今後に向けて

通年観光の実現には、訪れてもらうための取り組みがますます必要になる。増田町の場合、知的好奇心を刺激する歴史的背景や内蔵等の見学施設は下地として既にある。また、内蔵の所有者や増田町観光協会・増田町観光ガイドの会などにより、案内や解説の体制も整えられつつある。

今後の課題は、滞在時間の長期化と地域への利益還元の拡大だ。

具体的には二次交通の充実や宿泊施設と飲食店の充実がある。横手市増田町へのアクセスは、秋田新幹線の停車駅である大曲駅からローカル電車に乗り換え十文字駅まで約30分、そこからバスで約10分ということになる。10分という距離はタクシー利用も可能なため、それほど不便さは感じないが、本数の増強や待ち時間の短縮などは継続的な協議が必要となる。

また、観光客が使うお金の額は滞在時間の長短によって決まる。このため1人当たりの単価を増やすには受け入れの基盤となる宿泊施設と食事処である飲食店の充実が欠かせない。現在、秋田県内の民間企業が、廃業した増田の町屋(内蔵を含む)を買い取り、景観を保存したまま飲食店等を

開業する計画や、増田町内の有志により蔵を改装した宿泊施設、芸術系大学との連携による(卒業生の開業先として)小規模な工芸品製造販売所の整備などが検討されている。

湯沢市など近隣観光地との周遊における連携や、宿泊プランを活用して観光客が他地域に宿泊しても地元利益還元される仕組みづくりも有効な手段となる。

増田の内蔵のあるまちづくりも酒蔵ツーリズムも、『蔵』に代表される既存の地域資源を最大限に活用しようとする取り組みに違いはない。地域が主体となり自治体を巻き込み、世代や業種を超えた『まち(地域)づくり』が求められている。

(注1) 写真集「増田の蔵」は平成19年に当時の増田十文字商工会によって再刊され、平成24年には、新たに会員となった蔵等を追加したものが蔵の会によって発刊されている。また「蔵の日」は平成18年の第1回より毎年開催され、平成24年には第7回が開催された。

(注2) 政府は本年1月23日に開催された第1回産業競争力会議において、日本のコンテンツやファッション、文化・伝統を産業化し海外展開する「クールジャパン(格好いい日本)」の推進を掲げ、3月12日には日本産酒類の輸出促進策を検討する省庁横断の連絡会議を新設し、クールジャパン推進の一環として初会合を開催している。

スポーツ拠点づくり推進事業

静岡県袋井市

エアロビックで市民の健康づくり

ジュニアの全国大会も開催



袋井市健康推進部スポーツ推進課 主任主査

戸塚隆雄

地域活性化センターでは、スポーツ拠点づくり推進事業として、市区町村とスポーツ団体が連携・協力して全国各地に青少年があこがれ、目標とするスポーツごとの拠点を つくることでスポーツの振興と地域の再生を推進する取り組みを支援している。

今回は袋井市での取り組みをご紹介します。（地域づくり情報課）

日本一の健康文化都市を 目指して

袋井市は、平成17年4月に袋井市と浅羽町が合併し、新「袋井市」が誕生しました。静岡県の西部に位置し、温暖な気候と豊かな自然に恵まれた田園都市です。また、国道1号をはじめ東名高速道路、東海道新幹線、東海道本線などの交通条件にも恵まれ、農業・工業・商業がバランスよく発展している地域です。

温暖な気候に恵まれているため、お米・お茶・温室メロン・野菜・花など多彩な農業が営まれ、都市部と農村部が均衡のとれた発展をしています。

「エアロビック」の講座や教室が、スポーツ施設や公民館等で市民を対象に開催され、これをきっかけにエアロビックの普及促進が始まりました。

ジュニアのエアロビック 大会開催

平成17年度には地域活性化センターの「スポーツ拠点づくり推進事業」に採択され、10年間の補助を受け、スポーツ振興と地域活性化を図ることを目的に、全国の小・中・高校生を対象とした「JOCジュニアオリンピック全国エアロビック選手権大会」を日本エアロビック連盟と共催で毎年開催しています。

会場は、2002年のサッカーワールドカップ、2003年の静岡国体など様々なイベントの舞台となったエコパのアリーナで、全国のジュニア選手のあこがれの地です。

今年は、1月20日（日）に開催され、全国から各地区予選（全国8会場）及び前日のチーム予選などを勝ち抜いた選手308名が参加。個人競技の「シングル」と、3人一組の「トリオ」、5、6人一組の「グループ」、団体の「チーム」部門の4部門で年齢別に、ジュニア日本一の栄光を目指し行われました。また今年の大会からシングル部門に男子の部が新たに設けられ、力強い演技が披露され

ました。

選手は、軽快な音楽が流れる1、2分間で、とびっきりの笑顔を見せながら、機敏な動きで演技の技術、難度、芸術的な表現力などの得点で順位を競います。会場には、約2千人の観客が来場し、音楽に合わせた声援で盛り上がりました。

今年の大会では、本市から、地元で活動している「袋井FLASH LIGHT」が前日のチーム部門の予選を勝ち抜き、本大会へ3年連続で出場。さらには、シングル及びトリオ部門で大会開催以来8回目にして初めて選手が出場できました。

これらは、選手本人は言うまでもなく、指導者や関係者のご努力とご



全国エアロビック選手権大会の開会式



幼稚園児によるウェルカムデモンストレーション



大会の様子



地元特産品などを販売する出店ブース

協力の賜であり、国内最高レベルの大会で戦える競技力のレベルに本市の選手が達していると改めて認識できました。

市民ボランティアも活躍

開会式では、地元の浅羽南幼稚園の園児や先生ら152名がウェルカムデモンストレーションを行い、かわいい演技で選手を出迎えました。さらに、昼の休憩時にも市民らによるエアロビクの演技が披露され、会場から大きな拍手が送られるなど交流の輪が広がりました。

選手誘導や進行、館内整理等に市民ボランティアと市内中学生が協力。袋井のおもてなしの心で接し、選手が参加しやすい環境づくりをサポートしていただき、大会を無事に終了できました。

特に、中学生は、ステージ近くで大会の臨場感を味わいながら、エアロビクに興味をもたれたと期待しています。

屋内出店ブースには、9店舗が出店し、エアロビクグッズをはじめ、地元の米を使ったおにぎりや団子、袋井市の自然が生み出す野菜などを販売。また風味豊かでこくとうま味が特徴の「ふくろい茶」など袋井市

の特産物も販売し、会場は大盛況でした。

さらに大会上位入賞者には、名産品の一つである「クラウンメロン」や「メロンゼリー」を副賞として贈りました。

大会では全国から選手、役員、保護者、チームメイトまで含めると約1500人が袋井市を訪れると推定され、宿泊、飲食、お土産などを考えると、経済効果は極めて大きいと判断しています。また「エアロビクのまち袋井」を全国へ情報発信するとてもよい機会でもあると思います。

袋井市ではこの大会を契機に、エ

アロビクの拠点を目指した事業を展開しています。主な活動としては、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校などに講師派遣を行い、エアロビクの出前指導を実施しています。また、市民のエアロビクの演技発表の場として、毎年3月に「エアロビクフェスティバル」も開催しています。

トップアスリートを養成

この大会への地域活性化センターからの補助は、平成26年度までの10年間となっていますが、事務局としては、平成27年度以降も継続して大会を開催したいと考えています。長

期的に安定した財源の確保は大変難しいものの、定着化に努めていきたいと思っています。

そして今後も市民に夢や希望を与えることができるトップアスリートを袋井市から輩出できるよう競技エアロビクを普及、支援していくとともに、さらなる市民の健康増進に積極的に取り組んでいきたいと考えています。

住民の幸福実感向上を目標に ～東京・荒川区が幸福度指標を導入～



公益財団法人荒川区自治総合研究所研究員

● 森田修康

荒川区民総幸福度 (GAH) とは

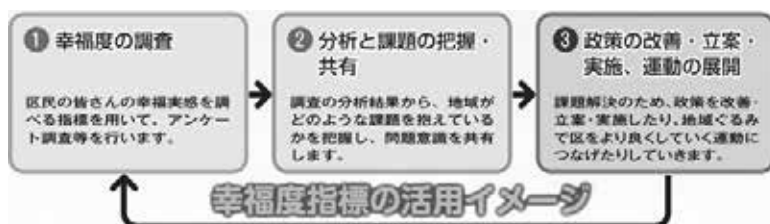
東京都荒川区は、「区政は区民を幸せにするシステムである」という区政のドメイン(事業領域)を定め、基本構想における区の将来像を「幸福実感都市 あらかわ」としています。

これを受け、区の抱える課題等について調査研究する荒川区自治総合研究所では、荒川区民総幸福度(グロス・アラカワ・ハッピーネス・GAH)の研究に取り組んでいます。これは、区民の幸福度を測る指標を作成し、それに基づいてより良い区民サービスを実現し、区民の幸福実感の向上を目指すものです。

このように区では、全国の自治体に先駆けて幸福度について研究を重ね、これまでGAHに関する書籍の出版や中間報告書の公表等を行ってきました。現在、この取り組みは、多くの自治体や研究機関、さらには海外からの視察・取材を受けるなど広く注目を集めています。

GAHの政策への活用方法

平成24年8月には、『荒川区民総幸福度(GAH)に関する研究プロ



ジェクト第二次中間報告書』において、区民の幸福度を測るGAHの指標案を公表しました。

指標案は、主観的な幸福感や周辺環境の快適さなど46項目で構成されます。

こうした指標の政策への活用方法としては、図

のように、第1に、GAHの指標を用いて区民にアンケート調査を行います。

第2に、調査の分析結果から区民がどのような部分に不幸や不安を感じているのか、地域がどのような課題を抱えているのかを把握し、区民をはじめとする区に関わる全ての人や団体の間で問題意識

を共有します。

第3に、課題解決のために政策を改善・立案・実施したり、区に関わる人や団体が力を合わせて課題解決に向けた「運動」を展開したりしていきます。

幸福実感向上の政策も実施

このような研究と並行して、これまで、区民の幸福実感の向上に寄与すると考えられる政策の実施にも取り組んできました。

例えば、当研究所では、「不幸を減らす」という視点から、「子ども貧困・社会排除問題」の調査研究に取り組んできました。その提言を受け、区では、スクールソーシャルワーカーの設置や、教員経験者、大学生のボランティア等による子どもの相談・学習支援などを行っています。

GAHの今後

平成25年度には、GAHの指標案に基づき、第1段階の区民アンケート調査を実施する予定です。その後は、アンケート調査の詳細な分析や対面調査の実施などにより、区民の幸福実感の向上に寄与するきめ細や



GAHに関するワーキング・グループの議論の様子



GAHに関する書籍と第二次中間報告書
報告書は荒川区自治総合研究所HPでご覧になれます
<http://www.rilac.or.jp/>



かな政策を実施していくとともに、GAHの「運動」につなげていきたいと考えています。

行政だけでは区民の幸福実感の向上を図ることはできません。GAHをきっかけとして、区に関わる全ての人や団体が、自分自身や身近な人、さらには地域の幸せを考え、問題意識を共有し、力を合わせて行動していくことで、あたたかい地域社会を築いていくことができればと考えています。

合コン開催、若者の起業を支援 —集落支援員とペアで地域づくりに奮闘—



小谷村観光振興課特産推進室 係長

● 北村和則

●人口減少に強い衝撃、地域づくり
応援団を設置

長野県小谷(おたり)村は人口約3200人の山里で、主産業のスキー場をはじめとした観光業はバブル期には年間200万人以上のお客さんが訪れていた。しかし、今や100万人以下となり、年々減少傾向を続け、村全体の活気も低下している。

このような中、国勢調査の数値が発表され、平成17年時点で3920人だった人口が平成22年には3221人となり、わずか5年間で699

人も減少。減少率は17・8%と県内2番目、全国でも10番目といった結果で、村関係者は予想を上回る事態に強い衝撃を受けた。

将来に強い危機感を持った村は、これまでのかたちにとられない新たな発想による村づくりを進めるため、「新たな地場産業と雇用の創出」を目的とした「特産推進室」を庁内に設置。「地域に新たな気付きと活力」を与え、「地域の魅力を再発見」するため、平成23年10月に新たな人材として地域おこし協力隊員2名を配置した。

さらに平成24年4月



今年3月9、10日に開催された「雪遊びコン in 小谷村」



「栃もちの会」の女性と地域づくり応援団。左端が協力隊員、右端が集落支援員

からは住民主体による地域おこしを促そうと、「新たな集落支援のモデル的取り組み」として、村内でもより少子高齢化の進んでいる地域の事務所に、集落支援員と協力隊員を1人ずつペアにし、「地域づくり応援団」とし

て配置した。

応援団は計4チーム設けたが、これに伴い、協力隊員も新たに5人(うち1人は特産推進室に勤務)を採用した。

応援団がペアで活動するのは①地域内外の視点など、それぞれの特性を活かした相乗効果を発揮する②お互いに意見交換したり、相談相手となったりして、地域内で孤立しない③ことなどを狙いとしている。

ここでは「地域づくり応援団」の奮闘記として支援員・隊員の取り組みを以下の2例紹介したい。

●合コンでカップル16組

小谷村の集落では「○○さんちの息子は一人もんで嫁さんどうかにおらんかね」「若い衆の出会いの場がない」といった話をよく聞く。嫁・婿不足は村にとっても人口減少の一因となる大きな課題であり、特産推進室と地域づくり応援団でこの問題に正面から取り組むこととなり、出会い創出と小谷村の情報発信を目的に「小谷と田舎コン」を開催した。

この合コンは支援員・隊員のみで運営ではなく、村内外有志で実行委員会を組織し、未婚者をスタッフ兼参加者として出会いを創出するなど工夫した。9月には「山コン」、3月には「雪遊びコン」を開催し、全国から男女延べ110名が参加し、16組のカップルが成立した。

カップリング率は実に29%と、この種のイベントとしては極めて高率

で、このうち3組には村内未婚者が含まれており、目的の一つである出会いの場となった。「また小谷村にきたい」といった参加者も多く、観光や経済など様々な面でプラスの波及効果の高い取り組みとなった。

●地域伝統食による起業

今から30年前、女性グループ「栃もちの会」が地域伝統食「栃もち」の製造・販売を始め、地域の女性たちの貴重な働き場所として長年、栃もちづくりを行ってきたが、高齢化など様々な事情から平成23年に休止状態となった。

その後、平成24年1月に協力隊員が中心となり「栃もち教室」を開催したところ、地域の若者による食文化伝承の機運が高まり、同年4月の「地域づくり応援団」の配置と併せ、かつての「栃もちの会」の女性を先生に、地域の若者や応援団が習い、つくるといったかたちで栃もちづくりが再開され、若者による起業など新たな展開につながってきている。

●新たな地域づくりへ

「地域づくり応援団」は「住み慣れた地域で暮らし続ける。地域づくりは村民が主役。行政主導ではない、新たな地域づくり」を目標としている。これには「集落・地域」「支援員・隊員」「村・関係団体」の連携・協働が重要であり、目標に向けて一歩ずつ様々な取り組みを進めていきたい。

移住促進に向けコーディネーターを養成

～古民家を改修、島暮らしの体験施設に～



NPO法人かみじまの風 理事

● 長谷川尚道

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回は平成24年度に同事業を活用したNPO法人「かみじまの風」の取り組みを、同団体理事の長谷川尚道氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

風光明媚な瀬戸内の島

広島県大崎上島町は、瀬戸内海を中心にある芸予諸島に浮かぶ大崎上島にある。四季折々の瀬戸内の海と島々の姿を見せてくれる、風光明媚な地である。旧大崎町、旧東野町、旧木江町が合併して生まれた町の面積は、本島属島を含め43・24平方キロを有しており、「瀬戸内海に七里七島」と言われた、一周が七里以上(約30キロ)ある7つの島のうちのひとつである。

橋は架かっていないが、本土との

アクセスは、フェリーが1日に、竹原から32往復、安芸津から16往復と比較的恵まれている。また、瀬戸内海特有の温暖な気候で、年間を通して過ごしやすい地域である。

歴史的に、大崎上島は海上交通の要衝として発展し、古くから製塩業や造船・海運業が営まれ、人と物と文化が集まり、「黄金の島」と言われ殷賑を極めた時代もあった。

こうしたことから、本町の産業構造は、他の島ではあまり見かけない工業と柑橘類を主要作物とする農業を中心に多様な産業が融合した形態

となっている。

地域の課題と定住促進

本町はほかの島嶼部と同様に過疎化や少子高齢化が大きな問題となっており、今後ますます加速するであろう人口減少に対して歯止めをかける必要がある。

合併後実施した「総合計画策定に当たってのアンケート調査」において、期待する町の将来像で各年代とも上位に挙がったのは「若者にとっても楽しく、多くの人が移り住み、観光客でにぎわう島」であった。

大崎上島を活性化させるためには、まず交流を盛んにし、将来的には定住人口を増やしていくことが肝要と思われる。すでに町では、「映画『東京家族』のロケ地巡り」、「体験型修学旅行の受け入れ」等の交流への取り組みは盛んに行っている。

次は定住促進であるが、そのため

には、根幹をなす「働くところ」「住むところ」を確保し、I・Uターン者が来やすい環境づくりを行い、その情報を島外に発信することが必要である。

そこで、「かみじまの風」では将来移住を考えている人に、田舎暮らしや島暮らしの素晴らしさを体験し、楽しんでもらうことにした。このため平成24年度は地域活性化センターの「移住・交流による地域活性化支援事業」を活用して、古民家(滞在型体験交流施設)を整備し、さらにその世話をする人、「町の肝煎り(定住促進コーディネーター)」(以下「肝煎り」という)を設けることで定住促進を図ることとした。



「肝煎り」と町民のためのセミナー

■移住・交流による地域活性化支援事業の概要

【事業概要】

地方が都市住民等を受け入れる移住や交流人口の増加等につながる地域交流の推進により、地域を活性化することを目的として、市町村等または地域団体が実施する移住・交流を推進する事業に対し支援する。

【助成対象団体】

市町村（特別区を含む）、広域連合、一部事務組合等

【助成金額・助成率】

助成金額は、1件につき200万円が上限
助成率は、助成対象経費の100%以内

【交付団体】

平成24年度 51団体

平成25年度 54団体

【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課

電話番号 03-5202-6133

事業実施と成果

（1）「町の肝煎り」の設置と活動

平成24年5月より「肝煎り」募集のチラシを配布し、ボランティア仲間、各分野の名人・達人等30人を集め、「肝煎り」候補者とした。さらに、かみじまの風を中心に農業委員会等関係機関による「肝煎り」のバックアップ体制を構築し、3回の研修を実施した。

研修の最終回では、「島の暮らしと古民家を考える」と題したセミナーを開催し、広く町内に聴講者を募り、60人以上の参加者を集めた。セミナーでは古民家の再生や活用に関する深い山口大学の坪郷教授から定住促進と文化のかかわりについて斬新な提言を頂いた。

「肝煎り」は移住希望者が来島さ

れた際の島内の案内、空き家の紹介、就職先への案内、菜園作りの手伝い、魚釣り体験の手伝いなど、きめ細かな対応でもてなしに努めており、定住促進に大きな役割を果たしていると感じている。

（2）古民家の改修と管理人の設置

古民家を1・Uターン希望者向けの滞在型体験交流施設とするため、4月より「おきうらの家」、8月より「おおにしの家」の2軒を借り上げ改修した。使われていなかった家を住めるようにするには、畳の張り替え、水回り（風呂、トイレ等）の改修、備品の調達など思わぬ費用がかかり、やりくり算段が大変であった。

また、この2軒の古民家に、管理と滞在者の寝泊りの世話をするため

の管理人を置いた。管理人は「肝煎り」と連携して、滞在者の要望に対応し、快適に過ごすための役割を果たした。

移住希望者には、この古民家で中期的（約1カ月）に島暮らしを体験していただくとともに、将来の仕事や住むところを探るよう支援した。また、古民家では食事の提供はせず、自分が畑で収穫した野菜や果物、釣ってきた魚を調理してもらうなど、ゲストハウスに近いシステムで滞在し、島の暮らしを体験してもらった。

（3）雇用促進のための職場情報の提供

町内及び近隣の雇用状況の情報を収集し、移住希望者向けの雇用情報を提供した。希望者には求人のある

企業を案内するなど、企業とのつなぎ役を行った。また、農地・空き家の情報集約も行い希望者へ情報提供している。

（4）町の魅力満載のホームページ作成

専用ホームページ「大崎上島定住促進支援プロジェクト」を新たに作成した。利用者にとって分かりやすいサイトとなるよう努め、滞在型体験交流施設の古民家「おきうらの家」「おおにしの家」を掲載。東京、京都、横浜、神戸、九州など全国からアクセスがあり、ホームページを見た移住希望者が島を訪れている。

このような取り組みの結果、平成24年度は、定住者8名の実績をあげることができた。

今後の展望

今回の事業を通じて、移住しようとする人は田舎にワクワクする何かを求め、ふるさとの原風景に癒しを求めていることが分かった。それを受け入れる体制づくりが肝要であり、そのため世話をする人の発掘と育成を試み、一定の成果を見た。今後は育成を強化し、人員も拡大していきたい。

さらには、古民家活用の視点をさらに発展させ、文化活動と賑わいづくりに活かしたいと考えている。



移住希望者による農業体験



空き家探しに同行する「肝煎り」（右端）

観光客と市民でにぎわう温泉街を目指して

「湯めぐり手形」に「屋台村」

温泉を中心にまちづくり

福井県あわら市は、福井県の最北端に位置し、平成16年に金津町と芦原町が合併して誕生した。同市は日本海、山岳地帯、湖、川など自然の恵みにあふれ、古くから温泉地として知られている。明治16年にかんがい用の井戸から温泉が湧き出し、翌年から芦原温泉の歴史は始まった。観光業はあわら市の基幹産業の一

つだが、景気や天災など様々な要因により年間宿泊観光客数は平成3年の136万人をピークに減少しはじめた。

このような状況の中、地域の宝である「温泉」を中心に地域資源を生かしながらまちづくりに取り組む団体が「あわら湯けむり創生塾」である。今回は、あわら湯けむり創生塾の「おしえる座あ創生部会長」（おしえる座あは観光案内所の名称）である笹原修之氏のお話を交え、同塾の活動を報告する。

地域を巻き込む組織づくり

あわら湯けむり創生塾（以下「創生塾」という。）は、あわら市商工会、あわら市観光協会、芦原温泉旅館協同組合及びRATY（あわら温泉活性化研究会）に所属する30代～40代のメンバーで構成されている。

平成16年の合併を機に2つの町が

ともにあわら市をつくっていくため、各団体の若手メンバーを中心に設立されたRATYが創生塾の先駆けだ。10年後のあわら市を見据えたまちづくりを目標に掲げたこの組織には、活動に自己資金を使うことも厭わないという意欲ある若者たちが集まったという。

その後、平成18年にRATYを中心に創生塾が結成された。「若者だからこそ、市町村合併による旧町間のしがらみにとらわれることなく、純粹に『あわら市のため』という気持ちで活動できるのかもしれない」と笹原氏は語る。

活動に当たって創生塾が活用したのが地域に根付いてきた「温泉」と「食」である。これらを連携させ、個々の素材を最大限に生かし、将来に残るまちづくりをするため若者たちは奮闘する。それには地域の協力が不可欠だと考えた彼らは、地域を巻き

込んだ組織づくりに力を注いだ。地域や組織において、いわゆる「顔が利く人」に活動の趣旨を理解してもらい賛同を得て、組織に取り込んだのである。若者が実働部隊として動く、そして上の者が地域・組織に話を付ける。このスタイルで、創生塾は設立以来活動を続けている。

「湯めぐり手形」で街に活気

創生塾がまず取りかかったのが、「湯めぐり手形」（芦原温泉の旅館や日帰り入浴施設の共通入浴券）の企画・販売事業である。

開湯130年の温泉地として栄えたこの地の活性化において、温泉を生かさない手はない。湯めぐり手形事業は、「観光客はいろいろな温泉に入りたいのではないか」という創生塾の温泉好きメンバーの発案で始まった。

湯めぐり手形（1枚1500円。木製の手形に3つのシールが貼られている。以下「手形」という。）は、芦原温泉旅館協同組合加盟旅館とあわら市の日帰り入浴施設（計15施設）に3回入浴できる手形である。1人で3回利用することも、複数人で利用することもできる。また、手形は入浴のみならず喫茶等にも利用でき、地域通貨としての役割もある。

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成18年8月
設立・運営主体＝その他各種団体
代表者＝前田 健二（塾長）
会員数＝10人（男性10人）
〈連絡先〉
〒910-4104
福井県あわら市温泉1-1-1
電話：0776-77-1877
ホームページ：
<http://yukemuri.jp/>
屋台村ホームページ：
<http://yukemuriyokocho.com/>



観光案内所「おしえる座あ」カウンターの「湯めぐり手形」

シールを飲み物等と交換できるというこのシステムは、創生塾が始めた先進的な取り組みである。

手形を始める前は3カ所ほどだった日帰り入浴施設が現在では15カ所まで増えた。この事業の実施にあたっては、旅館の賛同を得るのに苦労があったそうだ。「1泊数万円を支払う宿泊客と500円で利用する日帰り入浴客とを同じように扱うのは抵抗がある」というのが旅館の主張であった。

また、格安料金で温泉が利用できるため旅館には利用客が殺到し、中にはマナー違反者もいたという。旅館からの苦情に対しては、旅館組合の関係者が仲介に入り、入浴時間や



屋台村「湯けむり横丁」7軒の屋台が立ち並ぶ

人数を制限し、利用客に入浴上の注意を行うなどの対策を取りながら折り合いを図った。

事業を開始して5年以上が経つが、最盛期には年間約1万3千枚あった売り上げも今は3千枚程度に落ち着き、手形の仕組みが旅館にも利用客にも定着して双方と良い関係が築けているという。現在、手形の利用客として年間延べ1万人がこの地を訪れ、浴衣姿で湯めぐりを楽しむ姿はまさに活気をもたらしめている。

宿泊客の回遊性向上に向け屋台村

次に取り組んだのが、あわら温泉屋台村「湯けむり横丁」(以下「屋

台村」という。)である。この事業には旅館にこもりがちな宿泊客に地域を回遊してもらう意図がある。

駅前前の遊休地を利用しコンテナをベースとして平成19年に開設した屋台村(最大10店舗出店可能)には、現在おでん屋、串揚げ屋など7店舗が入っており、夕食の場や旅館で食事後にお酒を楽しむ場として賑わいを見せ、最盛期には年間約7万人、現在でも年間約3万人が訪れているという。

どの店舗も8席ほどで店主や他の客との距離も近く、地元農産物の地産地消も推進している。また、チャレンジショップとしての性質を持つ屋台村の店舗は、一般公募で決定し、これまで4店舗が屋台村を卒業してあわら市内外で自前の店舗を設けており、新規企業の誘因としての側面もある。

しかし、この屋台村の開設には、地元の飲食店からの抵抗があったという。飲食店の客が屋台村に流れるのでは、と懸念されたからだ。創生塾ではこの声を受けて、屋台村の集客力が一種のビジネスチャンスであると地元の飲食店を説得し、屋台村の店主には屋台がいっぱいときは地元の店を勧めるよう指導するなどして徐々に理解を得ていった。現在、

屋台村には観光客だけでなく地元住民も数多く訪れ、観光客と地元住民との交流の場となっている。

北陸新幹線開業を視野に

これまでに紹介した以外にも創生塾では、オリジナル商品の企画・販売や観光案内所「おしえる座あ」の運営、日本初の牽引式2人乗り自転車「レンタサイクル、ゆるキャラ」湯巡権三」による観光PRなどを行っている。

今後は屋台村の店舗補充、湯巡権三のPRに更に注力し、また北陸新幹線の開通に向けた取り組みを思案しているとのことである。最近では地元で感謝の言葉を掛けられることも多く、「目に見える形でまちおこしが出来て楽しい」と創生塾の活動に笹原氏は胸を張る。若い世代のバイタリティあふれるまちづくりと更なる事業展開に今後ますます期待が寄せられるところである。

編集委員 ● 野村 真弓



あわら市おもてなしキャラクター「湯巡権三」

書籍紹介

地域に飛び出す公務員ハンドブック



総務省地域力創造アドバイザー、前自治財政局長、元地域力創造審議官
椎川 忍著
今井書店刊（2012年10月20日発行）
定価：1500円＋税

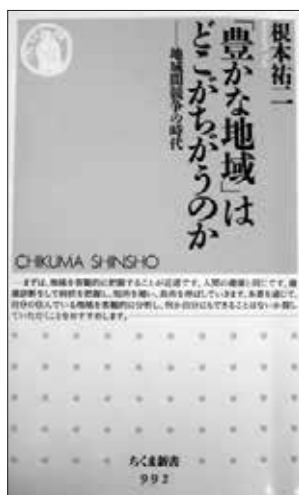
地域から日本を変えよう。

この言葉を合言葉に、全国の地域を元気にするため、役所から地域に飛び出した著者の地域おこしにかかる思いが1冊のハンドブックにまとまった。自治省（現在の総務省）に入省後、様々なポストを歴任し、全国の地域を飛び回的过程中で培った生きた経験と実践に基づいた本書は、著者の集大成ともいえよう。

本書には、著者が日本各地を歩き回的过程中で出会った、地域活性化の意欲あふれる多くの「地域人」の活動状況が掲載されていることも特筆すべき点である。著者が訴える、職務・組織、地域を超えた「横の連携」を体現する彼らの活動は、本書を手にとった読者の心に必ず響くであろう。同時に、「地域の絆を再生すればすべてを解決できる」と主張する本書において、「地域人」の存在が重要なカギであり、その人材育成についても言及している。

上記以外にも地域おこしを考える上でのヒントやキーワードが随所に散りばめられている本書は、公務員ならずとも、地域おこしに使命感を燃やす民間団体、NPO団体、まちづくり団体、学生など「地域人」にとって必携の1冊だ。

「豊かな地域」はどこがちがうのか—地域間競争の時代



東洋大学経済学部教授兼PPP研究センター長 根本 祐二著
筑摩書房刊（2013年1月10日発行）
定価：840円＋税

今、日本国内では人口減少が進む中で、各地における過疎化や地域の衰退が問題となっている。しかし、その一方で、確実に成長し続ける地域もある。本書は、このような活性化している「豊かな地域」とそうでない地域の違いについて、人口分析の手法を用いて11地域の成功事例及び失敗事例を検証している。

一般的に、「地域のことは地域の人が一番よく知っている」という考え方に陥りがちであるが、実際には「地域にしているとわからないこと、わかっていても目を背けていることも多い」、「地域の人が地域のことを知っているとは限らない」ことを指摘したうえで、客観的な人口分析による地域の特徴の把握方法を紹介している。人口の増減はその地域の魅力の有無と関連性が高いと考えられるからである。

人口分析の手法としては、①長期人口推移②コーホート（年代別人口増減）分析③従業・通学分析④経済センサス—の4つを紹介し、これらを用いた分析結果から見えてくる地域の特徴や魅力、課題、問題、提案等を示している。著者は、上記の人口分析を用い、実際に北海道から沖縄まで11の地域を検証し、シティ・マネジメントのあるべき姿を提唱するとともに、自治体経営や地域経営における人口分析データに基づいた地域の実情把握の必要性を説いている。

本書は、「地域を見る目を養う」ための1冊である。



朝霞市長 ● 富岡勝則

「笑顔に出会うまち・朝霞」を目指して

朝霞市は、埼玉県南部に位置する、人口約13万人の自治体です。都心から20キロメートル圏に位置するという地理的条件にも恵まれ、昔の武蔵野の面影が残る緑の多い住宅都市として着実に発展を遂げております。また、市内には東武東上線、JR武蔵野線が通っており、東武東上線との相互直通運転で、東京メトロ有楽町線、副都心線も利用できます。さらに今年3月16日には、東京メトロ副都心線と東急東横線・みなとみらい線が相互直通運転を始め、朝霞と横浜方面が直通約1時間で結ばれるようになりました。

このように大変便利なまちである一方、多くの自治体を抱える悩みであると思いますが、近年、市民の価値観の多様化やライフスタイルの変化に伴い、行政に対する市民ニーズが多様化しており、行政サービスの質や市民満足度の向上と、健全な財政運営の両立に苦慮しているところなのです。

そのような中、「子どもからお年寄りまで 安心安全なまち」「子育ての喜びを感じるまち」「市民みんなの笑顔でつくるまち」の3項目を柱にアクションプランを掲げ、朝霞を笑顔に出会うまちにすべく、ひとつひとつの課題に取り組んでおります。

さて、あまり知られていないことですが、実は、埼玉県は県土に占める河川の面積割合が3・9パーセントで日本一です。朝霞市内にも4つの河川が流れておりますが、その中のひとつに市の中央を流れる黒目川があります。県の水辺再生事業の対象にも選ばれ、日々整備が進んでいるこの黒目川は、市民の憩いの場であり、川沿いを散歩しながら四季折々の風景を楽しめます。

春の桜の下で行われる黒目川花まつりは、毎年多くの人で賑わいます。灯籠で飾られた堤防、たくさんの模擬店や渡し舟など、市民が大変楽しみにしているイベントです。

また、朝霞の夏を彩るのが、朝霞市民まつり「彩夏祭（さいかさい）」です。

このまつりは、便利な住環境になる一方で、地域への愛着や連帯感、人と人との繋がりが薄れていくことに危機感を抱いた市民の手によって始められました。開催当初は、盆踊りと打ち上げ花火をメインとしたオーソドックスなお祭りですが、規模も小さなものでした。それから回を重ねるごとに大きくなり、今では、約65万人の方が来場する、朝霞を語る上で欠かせない夏の風物詩となりました。

最大の特徴として、企画段階から始まり協賛金の募集、当日の運営まで、市民の手により行われている市民まつりであることが挙げられます。この彩夏祭の呼び物が、本州最古の鳴子踊りの祭典、「関八州よさこいフェスタ」と、市街地で打ち上げられる迫力満点の花火です。

笑顔で踊る若者たち、それを給水や警備等でサポートするシルバー世代を中心としたスタッフたち、様々なイベントで歓声をあげる子どもたち。生き生きとした人々を見てみると、これらのふれあいこそが朝霞の目指す姿であると、改めて実感しております。

今年はその彩夏祭も第30回を迎えることになりました。記念の大会となるよう、市民まつり実行委員会で企画を練っているところです。市民の皆さんはもちろん、全国の皆さんにも楽しんでいただけるお祭りになりたいと考えております。

皆様是非お誘いあわせのうえご来場いただき、朝霞で楽しいひと時を過ごしていただきたいと思います。

私事でございますが、このたび3期目の市政を担わせていただくことになりました。私が生まれ育った、愛するまち朝霞が、住む人皆にとって誇れるふるさとになるよう、全力を傾注してまいります。

朝霞市のこれからどうぞご期待ください。

霧島ジオパーク

～自然の多様性とそれを育む火山活動～

ジオパーク
Geo Park



美しく貴重な地形・地質に触れ、学ぶ自然公園—それがジオパーク。

景観



火山の博物館



植生



歴史・神話



霧島ジオパーク推進連絡協議会



都城市

高原町

小林市

えびの市

霧島市

曽於市



手前みそ
ですが…

長野県

上田市

172

長野県の東部に位置する上田市は、中央に日本最長を誇る千曲川（信濃川）が流れ、北は菅平高原、南は美ヶ原高原と、2,000m級の山々に囲まれた自然豊かな土地にあります。そのため、農産物にも恵まれ、高原野菜をはじめ美味しいお米や果物の生産も盛んです。

また、古くから信州の政治と文化の中心地であり、信濃国分寺をはじめとして奈良・鎌倉時代に建てられた文化遺産を数多く見ることができます。

戦国時代には、その名を全国に轟かせた真田氏によって上田城が築かれ、江戸時代にかけて城下町として大きく発展をとげました。今なお当時の面影が残る風情たどる町並みや、日本百名城にも選ばれている上田城は、全国の歴史ファン、真田氏ファンの心を惹きつけています。

近代においては養蚕、製糸業が盛んになり、町の文化を大きく発展させました。当時の繁栄ぶりがうかがえる製糸工場や繭倉など、貴重な近代建築も各所に残されています。

さらに、市内には、古くから人々に親しまれてきた別所温泉や鹿教湯温泉など温泉も数多く点在し、ゆったりと過ごすことができます。



■上田城と桜。「日本一の兵」と称された戦国武将・真田幸村の父、昌幸が築城した上田城。現在は公園として整備され、春には「上田城千本桜まつり」が開催される



■中国宋時代の禅宗様式を残す安楽寺八角三重塔は、全国で唯一現存する木造八角三重塔として国宝に指定されている



■上田のご当地グルメとして人気上昇中の「美味（おい）だれ焼き鳥」。にんにくの効いたしょうゆダレでいただく



■2012年4月に結成された「信州上田おもてなし武将隊 真田幸村と十勇士」。上田城で観光客をお迎えする



■上田市は全国でも有数の「まつたけ」の産地。秋には「まつたけ小屋」がオープンし、香り高いまつたけ料理を提供している



■美ヶ原高原。上田市北部の菅平高原とともに2,000m級の山々が連なり、両高原にはトレッキングやスポーツ合宿等で全国から多くの人々が訪れる



■別所温泉。市内には別所温泉のほか鹿教湯温泉など古くから愛されてきた名湯が数多くある

平成25年度地域再生実践塾開催のお知らせ

地域再生の方法について、さまざまな視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を全国6カ所で開催します。

◆開催内容

第1回 兵庫県豊岡市「生物多様性保全と地域再生～環境と経済が共鳴するまち～」

開催日：6月26日（水）～28日（金）（詳しくは左のページをご覧ください）

第2回 北海道小樽市「地域で育てる観光まちづくり人材」

開催日：7月16日（火）～18日（木）

第3回 広島県尾道市「海からはじまる歴史的空間の再生と実践」

開催日：9月18日（水）～20日（金）

第4回 新潟県長岡市「米百俵に学ぶ長岡の市民協働」

開催日：10月2日（水）～4日（金）

第5回 大分県別府市「多様な地域資源を組み合わせたまちづくり」

開催日：10月23日（水）～25日（金）

第6回 東京都品川区「地域ブランドと商店街の活性化」

開催日：11月21日（木）～22日（金）

◆対 象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる人

◆募集人員 各回40名（会場などにより変更あり）

◆参加費用 無料（開催地までの往復交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）

◆申込方法 申込書を当センターまで送付してください。

申込書の様式は当センターのホームページからダウンロードできます。

*詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】地域支援課 TEL 03-5202-6137

通信センター



豊岡市



小樽市

平成23年度総務大臣表彰等受賞団体動画が完成

平成23年度地域づくり総務大臣表彰を受賞した24団体、7名及び第16回ふるさとイベント大賞を受賞した7イベントの活動動画が完成し、インターネット上で配信されています。

地域をより良くしようと頑張る団体や自治体、個人の取り組みを全国に広く周知し、その活動のもたらす成果を称えようと実施されている「地域づくり総務大臣表彰」、全国各地で数多く開催されている地域の活力を生み出すイベントを表彰し、ふるさとイベントの更なる発展を応援することを目的に実施している「ふるさとイベント大賞」。

受賞団体の活動内容がよくわかり、関係者の生の声を聞くことができる動画によって、活字だけでは知ることのできなかった活動の様子も紹介されています。ぜひ地域づくりの一助としてお役立てください。

総務大臣表彰等受賞団体の動画は下記ホームページよりご覧いただけます。

地域活性化センターホームページ（<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>）

「地域づくりTV」（左側のバナー）

【問い合わせ先】地域支援課 TEL 03-5202-6137



ふるさとイベント大賞



総務大臣表彰動画1



総務大臣表彰動画2

第1回地域再生実践塾 兵庫県豊岡市

『生物多様性保全と地域再生～環境と経済が共鳴するまち～』

平成25年6月26日(水)～6月28日(金)

会場：豊岡市民プラザ

開催趣旨

現在、我々は地球温暖化をはじめ様々な環境問題を抱えており、持続可能な社会の構築が地球規模で求められています。そのため、地域社会においても環境問題を重要な課題として認識し、社会情勢の変化に対応しながら環境保全に向けた施策を積極的に推進することが必要です。豊岡市では、多様な地域資源を活かして様々な分野を連携させながらまちづくりを進めることとし、コウノトリの野生復帰に向けた取組をはじめ、人と自然が共生できる地域づくりに行政と住民が一体となって取り組んでいます。その中で、環境と経済を共に発展させることを目指す「豊岡市環境経済戦略」を定めるとともに、現在は「生物多様性地域戦略」の策定に向けて検討が進められています。

主任講師



大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
統合地球環境学研究所
准教授 博士(社会学)
菊池 直樹 氏

1969年生まれ。1999年から兵庫県立コウノトリの郷公園研究員(兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師)に赴任し、コウノトリの野生復帰プロジェクトに参画。地域に居住するレジデント型研究者として環境社会学をベースにしたコウノトリの野生復帰に向けた研究と活動に従事。2008年から、多様な人々がコウノトリのことを語り合う「鶴見カフェ」を開催し、市民、行政、研究者などをつなぐコーディネーターとして活動。2013年2月より現職。コウノトリの野生復帰の経験をもとに、地域環境の再生に向けた領域融合的な研究に取り組んでいる。
豊岡市環境審議会会長、環境社会学会理事

開催日程

- ・第1日目 6月26日(水)
 - 13:30～ 開講式・オリエンテーション
 - 13:45～ Lecture1 総論・問題提起
 - 14:20～ Lecture2 豊岡の挑戦
 - 15:15～ Lecture3 豊岡の"環境創造型"農業
 - 16:25～ Lecture4 環境と経済の共鳴
 - 17:20～ Lecture5 環境経済事業の課題と可能性
- ・第2日目 6月27日(木)
 - 9:10～ Field Work1 六方たんぼ
 - 9:50～ Field Work2 コウノトリの郷公園
 - 11:00～ Field Work3 祥雲寺田んぼ
 - 12:00～ 昼食(地域農業管理施設)
 - 13:30～ Field Work4 ハチゴロウの戸島湿地
 - 14:45～ Field Work5 田結湿地
 - 16:15～ Group Work1 視察結果のとりまとめ※城崎総合支所
- ・第3日目 6月28日(金)
 - 9:00～ Group Work2 「発表・講評」
 - 10:00～ Lecture6 総括
 - 12:55～ 閉講式

編集後記

▼全国各地には歴史的な遺産とも言うべき貴重な「蔵」が数多く残されています。老朽化した、使われなくなったりして取り壊され、年々減少傾向にあるようですが、一方ではそうした蔵の価値を再評価し、まちづくりに生かしているところも動きも活発化しています。今月号ではこうした蔵を生かしたまちづくり、地域活性化の取り組みを特集しました。

▼それぞれバラエティーに富み、興味深い12の事例を紹介していただきましたが、改めて印象に残ったのは酒蔵などが地域の貴重な観光資源となっていることでした。千葉県神崎町や兵庫県の播磨地域、佐賀県鹿島市などで行われている酒蔵まつりや酒蔵めぐりツアーはいずれも観光客に好評で、リピーターも現れているようです。酒蔵に限らず、伝統的な日本の建物である蔵の持つ不思議な魅力が現代人を惹きつけてやまないのかもしれませんが、読者のみなさんも興味を持たれた地域に出掛けられてはいかがでしょうか。

▼ところで、当誌にはこうした特集とは別に、毎月恒例の記事もあります。その一つがそれぞれの地域を写真で紹介していただく「手前みそですが：」です。今月は長野県上田市。信州東部の自然豊かなまちで、青空を背景とした「上田城と桜」の写真などは大変きれいでした。百聞は一見にしかず、と言うことででしょうか、写真の持つ情報量は極めて多く、編集者としても楽しみなページです。

(堀)

「6月号予告」
特集Ⅱ自転車を利用した地域活性化(仮)

地域づくり5月号

2013年5月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-34 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。



豊かな街づくりに 役立つ宝くじ。

宝くじの収益金は、図書館や
動物園、学校や公園の整備を
はじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、
いろいろなかたちで、みなさまの
暮らしに役立てられています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する
事業への助成を行っています。

日本宝くじ協会ホームページ <http://jla-takarakuji.or.jp/>

